

武2年（1335）に足利尊氏が斯波高経の長子家長を奥州管領として下向させ、北朝方の勢力拡大を図ったことに始まるといわれる。奥州斯波氏は足利泰氏の長男尾張守家氏が斯波郡へ下向し、高水寺城に在城して斯波氏を称するが、四代高経までは家臣に支配させた可能性が強く、独立した城郭を築いたのは家長以降と推定されている。

家長以後の斯波氏は足利氏の支流として、河村氏の北上河東を併合し紫波66郷を支配し、さらに大永元年（1521）および天文6年（1537）には南部氏と交戦し、岩手郡を攻略している。隆盛を極めた斯波氏は「斯波御所」と称され詮高の代には次男を零石に、三男を猪去に配して「三御所」

といわれる。しかし、三戸南部の南進攻策は対立抗争を激化させ、南部氏の支族九戸政実の弟弥五郎が入婿によって出丸の吉兵衛館が築かれるなど一時小康状態を保ったが、天正14年（1586）の吉兵衛の出奔以後斯波氏の威勢は衰え、同16年（1588）岩清水右京の謀叛を契機に南部信直の攻略をうけて滅亡した。

南部信直は高水寺城を郡山城と改め、中野康実を城代に任じ、郡山は郡治の中心となった。盛岡城築城に際しては南部利直の10数年間の居城ともなったが、寛文7年（1667）に至って廃城となり、古材は盛岡城本丸に使用されたと伝えられる。

柳田館 紫波郡紫波町片寄字中平

奥羽山系の支脈東縁部にあたり、小谷によって形成されるほぼ独立した丘陵上に占地し滝名川流域から北上河岸まで一望される。墨塙に囲繞される南・北郭とその東郭によって構成され、東西400m、南北300mに及ぶ。頂部の標高は217.9m、東側低地との比高は58mである。山麓には安倍道の古道が南北に



通じ、付近には永正4年（1507）開基の浄土宗隠里寺、永禄年中（1558～1570）創建とされる浄土真宗願円寺がある。

南西に位置する最高位の南郭は、東西75m南北40m、約3,000m²のもっとも広い削平地と東側に段状をなして続く腰郭状の平坦地からなり、各1～3mの比高がある。最上段の東縁には土留状の石列が続き、北東隅には道路が開かれる。また、北東寄りの一画には八幡宮の祠があり、南西辺には土壘状の微地形が残存する。

北郭は南郭と鞍郭を挟んで馬の背状をなす郭である。鞍部は東西120m、南北40mを計り、東方ほど広い平坦地が区画され、中央部には井戸跡がある。これより北側には南斜面を切る小削平地があり、北東端に張り出す削平地を続く。

南・北郭を巡る墨塙は、南・北辺に二重に築かれ、西辺では南辺から続く外堀が熊戸沢に、東辺では東郭に境する中堀が北辺に連なる。南辺の内堀は堀幅5.7m、深さ2.5m、土壘の基底幅3.9m、高さ1.1mであるが、外堀はこれより小規模となり、内堀に先行する構築が推測される。また、北郭北東端の中堀では堀幅8.9m、北郭削平地からの比高は15mに及ぶ。

東郭は東西90m、南北180m、3郭中最大規模を擁し、北東部を欠く不整な扇状を呈する。東斜面に沿った段状の削平地は、大別して空堀に画される南辺、中央部、鞍部以北に分けられるが、東西12m、南北30mほどの削平地を最大に1m前後の比高を有して2～6段が続く。

墨塙は西辺の中堀と土壘のほか、三方を巡る。南辺削平地を限る東西堀や釣形に屈曲する埋没著しい空堀があり、前者は堀幅7～8m、深さ3mほどの薬研堀である。

発掘調査は、東北縦貫自動車道建設に伴って昭和50・51年に東郭の大部分と北郭等の一部を対象に実施された。調査の結果、重複する防禦施設や建物遺構などの生活遺構と多数の遺物が発見され、東郭は中世末期における家臣の屋敷跡と推定される。

防禦施設では14条の空堀と土壘、柵列、城戸等がある。空堀は中堀をはじめ、東郭を蛇行する堀など14条があり、郭面からの堀幅・深さとも最大15m、法面が37～50度の急勾配をなす薬研城である。空堀に沿って築かれる土壘は、上幅の最大1.2mであるが、さらに木柵列が付設される。また、搦手口にあたる東郭の南西端には、土壘と柵列に続く城戸が付設され、敷石や踏段を伴う数期の冠木門跡がある。

削平地は切土と盛土によって造成される。東西6～9m南北9～24mの規模をもち、東郭では6～7段に渡る階段状をなして続く。東郭中央部には野面積みの石垣を築く削

平地や土留め石を旧表土上に埋設する部分がある。削平地には西辺には排水溝とみられる溝を伴い、建物遺構や竈状焼土遺構等があり、改修や建てかえのある例が多い。

掘立柱建物は80棟以上が推定され、主要な建物と付属建物に分けられる。主要建物は梁行6～7.6m2～3間、桁行11.2～12m5～6間の南北棟であり、南・西2面に廂をもつ。小規模な付属建物は梁行3.8～4.7m1間、桁行8～8.5m4間の建物と3.6～5mの方形状の建物が含まれる。また、1.8～4.8mの竪穴をもつ建物19棟があり、それぞれ主要建物に付属する切妻の建物と推定される。

焼土遺構のうち、竈状をなす遺構は16基があり、焚口から燃焼部にかけて長楕円状をなし、燃焼部上面を径0.3mほどの焼土が環状に被っている。煙道は割貫かれ、最長0.9mを経て煙出しに達する。日常使用された竈跡と推定される。

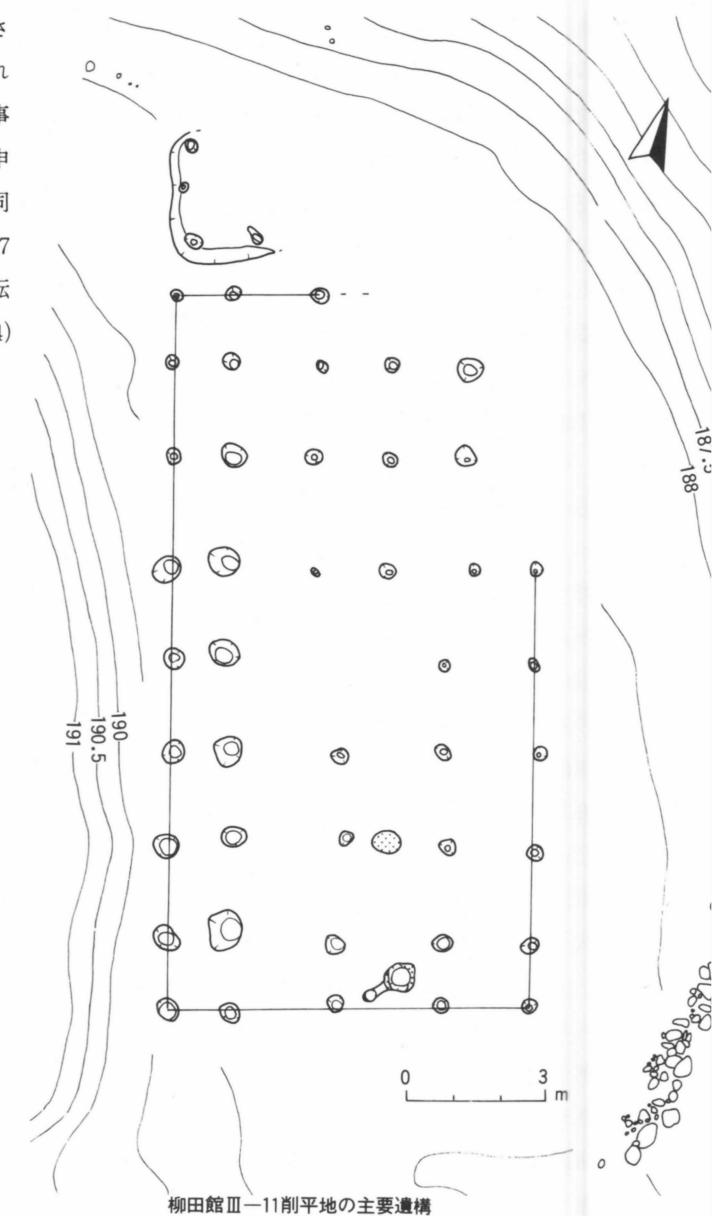
これらの遺構や削平地からは、陶磁器、金属製品、古銭石製品、木製品、穀類など2,000余点の出土がある。その多くは陶磁器であり、青磁、白磁、染付の舶載磁器と瀬戸・美濃産の灰納、鉄釉陶器の碗、皿類が殆どを占める。

用途別では、刀、小柄、鉄鎌、鉤、火縄銃の弾丸などの武器、釘、鎧などの建築用具、鍋・釜の厨房具、調理用搗鉢、貯蔵用甕、碗、皿、盃等の供膳具・茶器、聞香用香炉文房具の水滴、銅鏡、簪、毛抜などの装飾品、坩埚、羽口などの鋳鉄用具のほか、砥石、手洗鉢、茶臼など石製品等がある。これらには日常生活に必要な用具の殆どを占めているとみられ、火熱変質する遺物が散見されるが、16世紀を中心とする遺物が大部分である。

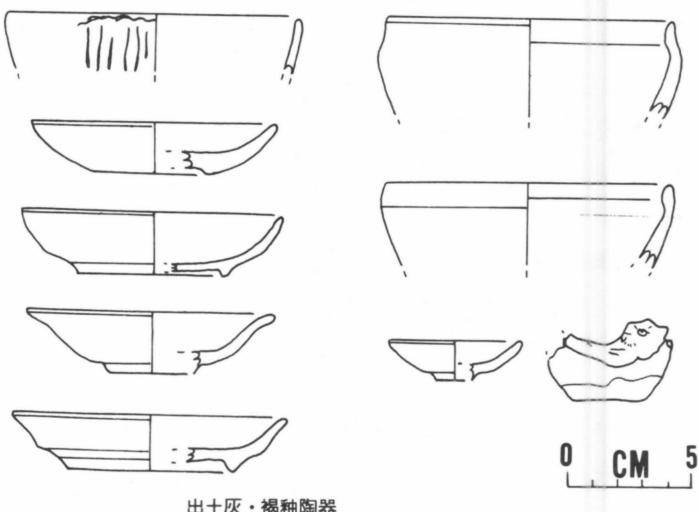
柳田館は、城主名から「吉衛兵館」、「中野館」のほか片寄城、今崎城等の別称がある。旧片寄村は、古くは樋爪氏の支配下にあったと推定されるが、片寄の記録は斯波氏時代末期に至ってからである。その間には中平の古町山薬師堂の本尊とされる貞治5年（1366）藤原朝光名の塑像があり、現在隠里寺に安置されている。戦記物「志和軍戦記」には元亀3年（1572）の飯岡館戦争に際して片寄文作、片寄吉三郎の活躍が記されるが、他の旧記には名を留めていない。次いで「南部根元記」によると、斯波氏没落の契機となる天正16年（1588）の岩清水右京の反乱に際し、岩清水館に敗れた右京の兄岩清水義長が「片寄に知りたる者」を頼って落ちているが、斯波氏家臣中には片寄氏や居館についての記録はない。

天正19年（1951）志和郡は南部信直の支配となるが片寄村を含む三千石は斯波氏攻略の功によって中野康実が所領し、片寄村今崎城にあって郡司を掌中していることが知られる。翌年の「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上」に

は異本があるが、「片寄、山城、破、中野修理持分」と記され同様に信直の重臣8名中に中野修理直康の連署がみられる。文禄3年(1594)4月には、「下屋敷片寄村へ諸用之事在て二、三夜被成御座候所(中略)九戸より来る隠岐と申牢人者乱心にて康実殿を相殺し畢。行年42歳にて逝去。同九日御死骸郡山中野館御屋敷へ移し奉」とあり、慶長17年(1612)に南部氏重臣の三家に列した正康は郡山城に転住している。以後片寄城の名は認められず、寛文4年(1664)八戸藩下にあっては廃城であったことが知られる。



柳田館III—11削平地の主要遺構



出土灰・褐釉陶器

比爪館 紫波郡紫波町南日詰字箱清水
北上川右岸に広がる扇状地性段丘の東端部にあたり、河岸低地との比高は2~4m、標高は90.8mである。赤石小学校を北西にして五郎沼北端まで不整な方形形状を呈し、外周には堀跡が水田として残存するなど低位な部分があり、その規模は東西・南北300mほどである。五郎沼の北には鎌倉時代の創建とされる大莊嚴寺跡があり、薬師神社付近には箱清水石塔姿群がある。元享3年(1323)の板碑は不動明王像を刻む県内最古の絵像碑である。また、付近には「あづま街道」や「鎌倉街道」と伝えられる道筋がある。

弘化3年(1846)の絵図によれば、南側は五郎沼に限られ、他の三方は幅8~12mの水田が郭を周り、堀跡の状況が知られる。郭内には薬師神社と参道、民家が散見される。

周辺には大銀、大日堂、城内、小路口等の古代から中世にかけての遺跡があり、発掘調査等によって比爪館と同時期の遺物が広範に分布することが明らかであるが、比爪館の発掘調査は昭和40年から実施された。第6次までの調査報告によれば竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構3棟、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、柵跡等を含む溝状遺構11条等が発見され、主として平安時代末期から中世にかけての遺物が出土している。

薬師神社の北西からは掘立柱建物跡2棟が検出され、東建物は東西42尺5間、南北32尺4間の規模をもち、西建物と建造時期を異にしている。また、神社北側の掘立柱建物は東西36尺4間、南北17尺2間であり、土師器・須恵器等の出土がある。中央部や北東部の調査区には竪穴住居や竪穴状遺構が分散し、土師・須恵器のほか11世紀の灰釉陶器、付近の土壌等からは12世紀の白磁碗・水注等が出土している。

中央部に検出された井戸跡は、開口部径3.55m×3.35mの円形をなし、下半では2.0m×1.7mの隅丸方形となる。底部には手斧痕を残す丸太と板材を組んだ方形の井筒が残存。検出面からの深さは2.35mである。埋土からは上層に15~16世紀の青磁陵花皿、下層から13~14世紀の青磁筒形香炉、仮名混じり木簡等



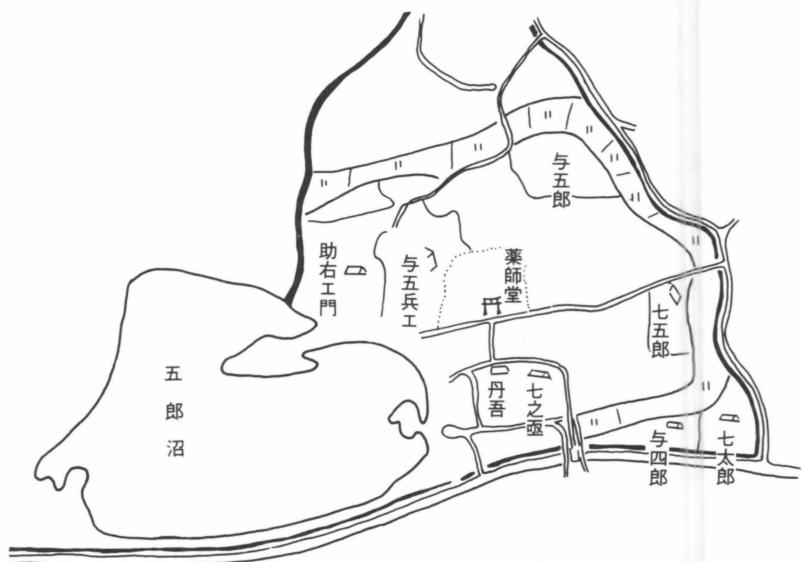
が出土している。木簡は両面に墨痕が認められ、一面には「上^左、^右つよく□か□」が判明する。共伴遺物から平安時代末期の使用が推定される。

「吾妻鏡」に記述される平泉藤原氏の一族比爪氏の居館は紫波郡内に所在しており、擬定地は城山説、城内説、南日詰説があったが、発掘調査の進行とともに比爪館は後者である可能性が強まったといえる。

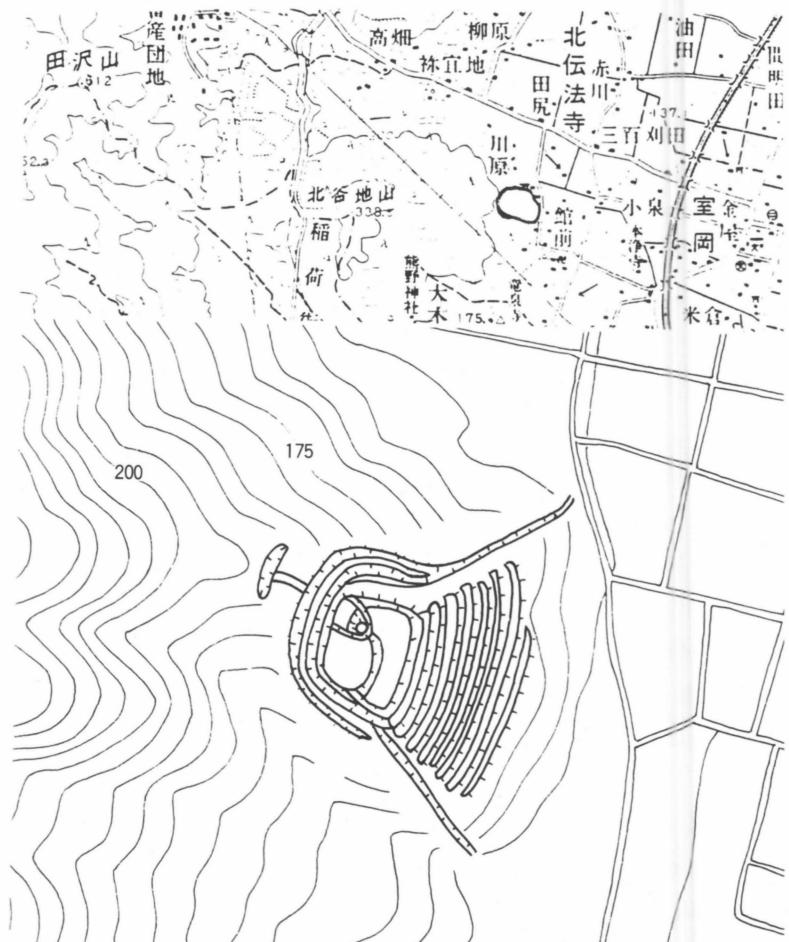
樋爪氏は清衡の子清綱が分家し、紫波郡一帯から産出する砂金を支配するため比爪の地に住したことに始まるといわれる。郡内には一族が分封していたと推定されるが、源頼朝の奥州攻略に際しては、居館を焼いて逃亡している。その後樋爪氏一族は厨川に出て投降し、俊衡だけが本領安堵されて樋爪の地に命脈を保ち、泰衡の子秀安を扶養したと伝えられる。

座主館 紫波郡矢巾町大字北伝法寺3

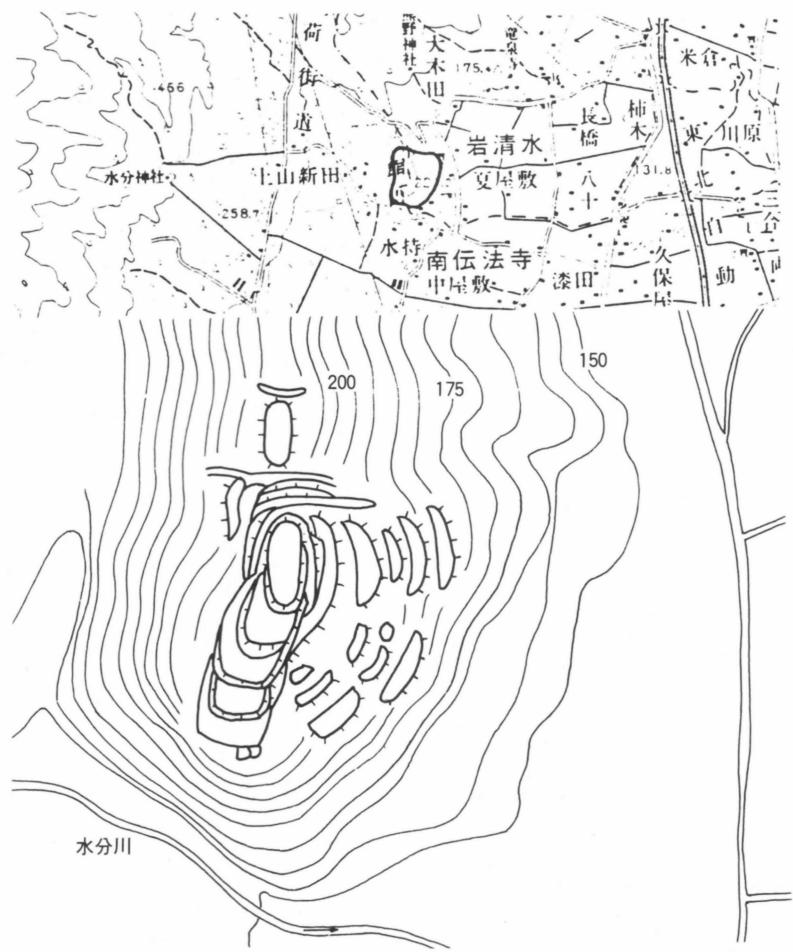
座主館は、奥羽山脈東根山系の一角、北谷地山東端の丘陵上に立地する。東向きの館で麓の集落は館前と呼ばれている。主郭は標高約190mの最高部にあり、南北34m、東西32mの範囲にほぼ方形に構築されている。主郭内の北部はやや高くなっている。物見台としての機能をもつものと考えられる。主郭の前方東側には南北43m、東西16mの規模をもつ二の郭が設けられ、やや広い腰郭がとりつく。また、麓に向かって、十段にのぼる狭い腰郭が付設される。主郭の北・西・南側には二重の空堀がめぐらされ、西側尾根上にはさらに空堀を重ねて基部を断っている。なお、本館の南に隣接し平安時代初期の創建と伝えられる寺院跡があり、屋彥山伝法寺と称して昔天台座主を置いていたといわれている。釈迦堂跡とみられる礎石立建物などの建物跡群や石碑・塚などが遺存する。座主館の構築時期、館主については不明であるが、寺との関連から、平安時代まで遡り、安倍氏との関連で把える見方もなされている。



弘化3年郷村御吟味御竿打図



岩清水館 紫波郡矢巾町大字岩 清水字城内
岩清水館は、東北本線古館駅の西方約4.5kmの北谷地山東端の丘陵上に立地する。主郭は標高221mの地点に、南北66m、東西30mの規模で構築されている。主郭の前方南側には階段上に平場がとりつき、上方より、南北21m・東西26m、同じく16m・25m、4.5m・24mの規模をもっている。その最先端には、二個の巨石があり、一個に東西方向一直線に櫓の柱のほぞ穴とみられる溝が刻まれている。西側は急峻な崖となっているが、東側の斜面は麓近くまで腰郭が築かれ、上部の幅9.7～12mに及ぶ2段の大規模な腰郭と五段の小さく規格な腰郭とに分けられる。主郭の北方背後は二重の空堀で区画して砦状の平場をつくりだし、さらに北側に一条の空堀を付設している。中腹には熊野神社跡があるが、今は麓に移されている。また、西側から南側に水分川が流れ、農業用水のほかほりの機能ももっていたと考えられる。岩清水館の館主は斯波氏の家臣岩清水氏で、『祐清私記』の岩清水禪門が初見とされている。



煙山館 紫波郡矢巾町大字煙山

煙山館は、岩崎川の左岸約300mの城内山の東端丘陵上に構築されている。主郭は標高260mの地点に南北16m、東西31mの楕円形につくられており、郭内には大石による石組遺構や「唐戸石」と呼ばれる巨石が現存している。前者は、古代の石神信仰に関わる遺構(磐座)あるいは狼煙台と考えられ、後者は朝鮮半島にみられる支石墓に類似した形態をもっている。主郭の前方東側には十段近くの小規模な腰郭がとりつき、なかには空堀をめぐらした櫓台状の平場もみられる。主郭の北・南側にも腰郭状の台地が3段づつ設けられており、南側は北側に比して急斜面となっている。西側の基部は空堀で切断されており、この空堀から東側まで南面を斜めに走る犬走りが認められる。なお、館の麓前面には観音堂があり、古い民俗行事を残している。煙山館の館主は、斯波氏の一族である煙山氏といわれ、『煙山村郷土誌』によれば、天正年間煙山主殿(藤原道国)が城を城内に築いて居住したと伝えられている。



徳丹城 紫波郡矢巾町西徳田ほか

大和朝廷にとって長年の懸念であった陸奥国胆沢の地を鎮定し胆沢城を築いたのは延暦21年（802）で、翌延暦22年には零石川南岸志波の地に志波城の築城に着手している。志波城は大和朝廷の最前線基地として10年近く機能したもの、零石川の度重なる水害により移転を余儀なくされ、弘仁2年（811）の冬、嵯峨天皇の裁可を受け徳丹城が造営されることとなった。

こうして築城されたのが徳丹城で、北上川西岸の低位段丘上に立地している。徳丹城築城には征夷将軍文屋綿麻呂があたっている。綿麻呂は、弘仁元年に東北地方開拓の責任者となり、弘仁2年には爾薩体・幣伊に軍を進め、征夷将軍に任命されていた。その築城時期は詳らかでないが弘仁3年に着手し、同4年に完成建置されたものと解釈されている。

徳丹城の規模は、鎮守府胆沢城・志波城に比べてかなり小さく、胆沢城の外郭線1辺670m、志波城の外郭線が1辺840mを測るのに対し、徳丹城のそれは1辺350m（約方三町）を測るにすぎない。外郭線は一部に隅切の形状をもつが、ほぼ正方形を呈する。外郭は、太さ30~40cmの丸太材（用材は栗が主）によって囲まれており、70mおきに櫓が設けられている。丸太材列の内外には溝がめぐらされ、

外溝は内溝に比べて規模が大きくなっている。なお、内溝は櫓の付設場所で城内に「コ」の字状に屈曲し、外溝は城門の位置で外側に大きく屈曲する。

外郭各辺にはそれぞれ城門（東門は未調査）が設けられ南北の門は中央に東西の門は北に寄っている。正面にあたる南門は徳田神社境内にあり、径45cm以上の丸太を用いた八脚門で、正面30尺、側面16尺となっている。南門跡では緑釉の瓦も発見されており、瓦葺きであった可能性が強い。なお、他の調査地区では瓦は検出されていない。

城の中心部内城は中央やや北寄りにあり、1辺約80mの規模をもっている。内郭線は掘立柱列で画され、南・西辺（東辺は未調査）中央には門がつくられている。基本的に四脚門で、南門跡では雨落溝も発見されている。

内城正殿は内城地区のほぼ中央に位置しており、東西5間14.57m、南北2間5.91mの規模をもつ南向き東西棟で、4面に廂がまわされている。正殿の前面両側には、それぞれ南北5間、東西2間総柱の脇殿が配置されるほか、内城側の南面両側に門に付随する建物が検出されている。

そのほか、官衙等と想定される建物や竪穴住居なども発見されているが、それらを総合的に検討するためには、今後の調査結果に負う部分も多く残されており、なお一層の研究の進展が期待される。

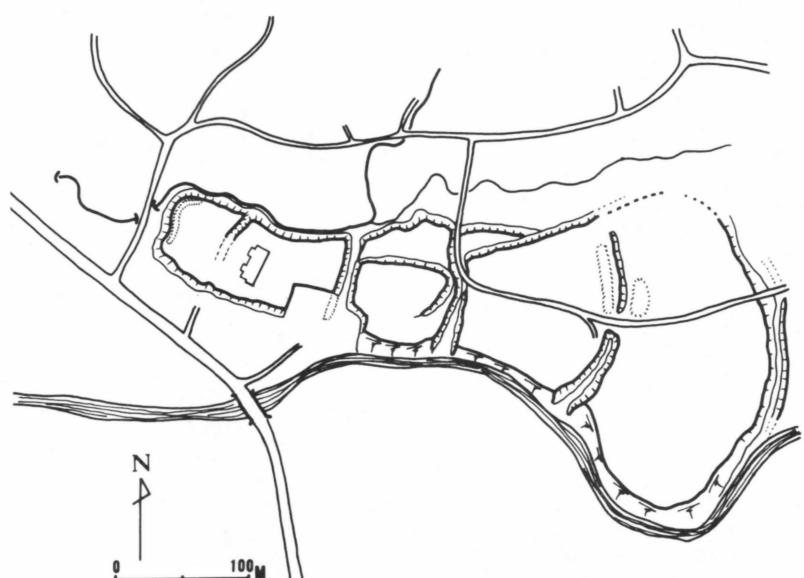
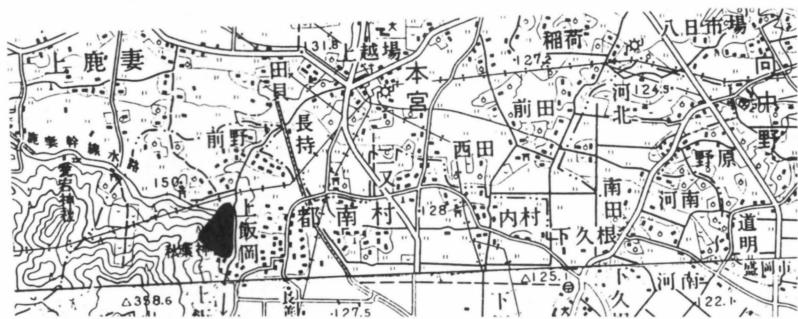


飯岡館 紫波郡都南村上飯岡字赤坂

飯岡山の北東山麓部に立地。背後の尾根を空堀で断ち主郭を築く。その正面は北東を向き3~4段の腰郭が取巻く。その下に空堀が三方向から入る。なかでも南の空堀は沢地形を利用し幅約15mを測る。この最奥部には土塁が築かれ、東へと下る。東空堀にも両端に土塁が沿う。この空堀と北空堀に囲まれ、二の郭の平場があり先端に空堀・土塁が付く。鹿妻幹線水道隧道を隔てた平場も郭となる。南は秋葉神社境内が郭で、腰郭がまわり北面に空堀、神殿背後にも尾根沿いの土塁があり前述の南空堀へと続いている。

「志和軍戦記」の記述に「前は平地に大堀を構へ」とあることから、鹿妻水路に沿って堀があったと思われ、そうすると秋葉観音境内も南の出郭になろう。なお、本館北西部山中地区の独立丘陵、及び鹿妻水路を南下した墓地の東側丘陵も城館跡と考えられ、特に後者には空堀状の沢地形も見ることができる。

城主は、斯波氏の重臣飯岡平九郎と伝え、周辺地域の中核的城館となっている。



乙部館 紫波郡都南村大字乙部字館

北上川東岸、南を乙部川北を沢川目の沢で侵食された東西に長い段丘上（標高約120m）に位置し、西端は国道396号線に達する。

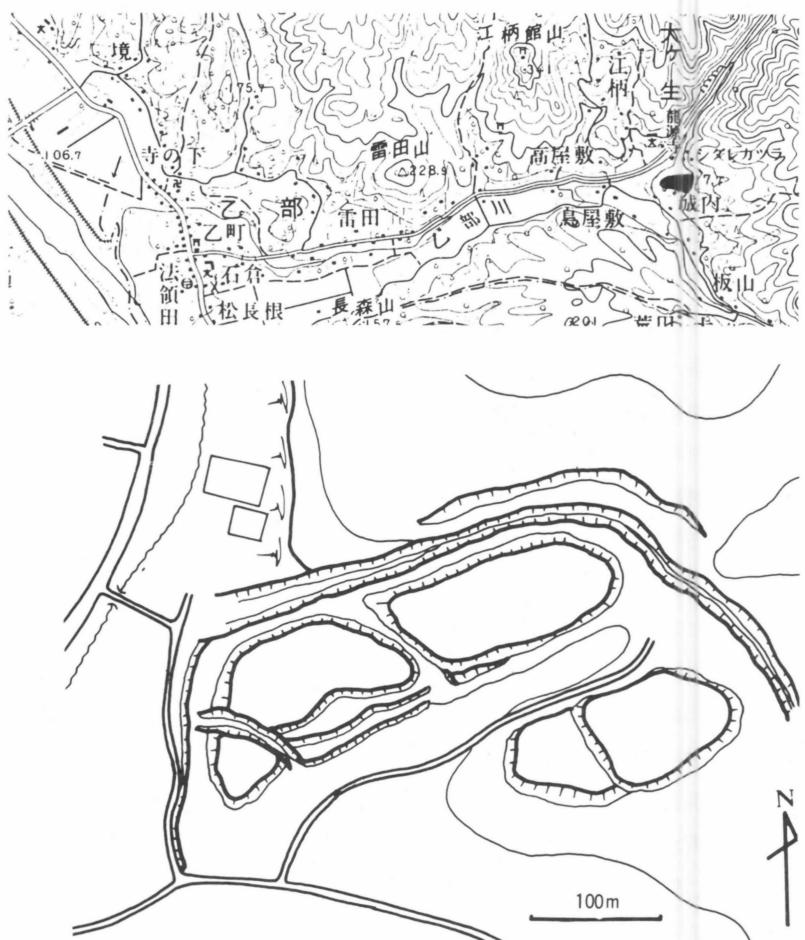
館南面は乙部川に面し、主郭部分では15~18mの断崖となる。主郭東西を空堀で切る。特に東側は大きく、幅約15m深さ10mに達する。この空堀は北面へ通じ北半は現在道路となる。主郭北部には腰郭の段が付く。空堀東側に一段高い平場があり郭となる。この郭の東にも空堀が南北に入る。さらに東は約150mリング畑が続き東端は約2mの段差が付きその下に空堀が入る。北側の遺構は明確ではない。主郭西側に空堀を隔て二の郭。その西は如法寺境内・墓地で、西端は沢が回り、約3mの段差がある。主郭・二の郭間の空堀西に土塁があり南に延び、その先に腰郭が付く。この部分が大手口となろう。

城主は斯波氏の臣乙部兵庫。後に南部氏により福士氏が居住したが、天正20（1592）年廃城となったという（紫波郡誌）。

大萱生館 紫波郡都南村大字大ヶ生字城内
岩前山西麓が乙部川に張り出す丘陵の先端に位置する。北西部の龍源寺山門横から沢を利用した堀があり、尾根を切断して東南部へ達する。堀の北側は段が付き、一部は幅約5mの帯郭となる。館は空堀で三区画され、中央が主郭と思われる。館南面には2～3段の帯郭が付く。その下に空堀状の沢が入り込む。この沢を隔てた南側丘陵頂部にも平場があり出郭になると思われる。

城主大萱生氏は、河村氏の一党で後に斯波氏の臣となる。「参考諸家系図（巻27）」には「代々大萱生并傍村ヲ領、大萱生北館ニ住ス」とあり、また天正年中玄蕃秀重の頃には「大ヶ生村南館北館トテ並有、其間ハ堀切也、北館ヲ本丸トス」とある。前述の南側丘陵が南館に相当すると考えられる。

なお、主郭西側には、大萱生家の墓碑と一基の白碑が建立されている。



(三) 花巻市・稗貫地区概観

花巻地方は北上川の中流域にあたり、奥羽山系から葛丸川・瀬川・豊沢川が、また、北上山系からは稗貫川・猿ヶ石川などの諸河川が、扇状地を発達させながら北上川に注ぎ、広大な北上平野の一翼を担っている。

古代においては、胆沢城と志波城の中間にあたる場所のため、交通の要衝として駅家、城柵の存在が推定されている。磐基駅は、豊沢川の北岸で、7～8世紀の群集墳がある熊堂古墳群一帯や、花巻城のある鳥谷ヶ崎一帯が比定されているが根拠に乏しい。また、方八丁という地名が、花巻市の宮野目方八丁と、石鳥谷町の江曽方八丁にあり、坂上田村麻呂や源頼時の柵と考えられて調査されたが、結論は未だ出ていないし、花巻地方の各城館の中にも、安倍の館、頼時の館、義家の館と伝えるものが多いが、やはり確証の無いものが多い。交通路としては、田村麻呂の創建という太田清水觀音から円万寺觀音を通り、石鳥谷町長谷堂觀音へ抜ける古道が考えられており、通称「安倍道」としている。安倍氏が衣川柵と厨川柵の間を往来したものという。稗貫という地名は「日本後紀」の弘仁2年(811)条に「陸奥国に於て、和我・蘿縫・斯波三郡を置く」とあるのが初見である。

鎌倉時代には、源頼朝の奥州平定後に鎌倉武士の所領となり、花巻地方には、石鳥谷町・大迫町・花巻市・東和町の一部を占める地域に稗貫氏が入部し、花巻市笹間と東和町の中心部から南には和賀氏が入部した。稗貫氏の本姓は中条氏である。隣りの和賀氏とは同族であるという。

建武新政では、稗貫(中条)時長は、陸奥国司北畠顯家の麾下に属して、北奥の現地奉行として活躍するが、南北朝時代に入ると斯波・和賀氏などとともに足利方として南部氏などと戦い、稗貫出羽守一族は討死している。この頃の板碑として花巻市円万寺周辺の正慶元年(1331)と同2年銘の碑や、大迫町御堂鼻の貞治7年(1368)銘の碑などの年号は北朝のものが使われている。

室町時代には稗貫氏は十八ヶ城(本館か)に居城し、郡内一円を支配して稗貫郡主を名乗っている。この頃は、稗貫五十三郷と称され、各地に一族や家臣を配して支城を築かせていた。花巻市では矢沢氏・似内氏・楢木氏・十二丁目氏・根子氏・川口氏・北湯口氏・大畑氏・円万寺氏・葛氏などが知られ、石鳥谷町に新堀氏・八重畑氏・関口氏・小森林氏・瀬川氏が、大迫町には大迫氏・亀ヶ森氏、そして東和町東部には小山田氏が居住している。その他にも、稗貫郡内の地名を冠する人々が数多くみられ、さらに郡外の地名を名乗る者もあることから、全盛期の稗貫氏の勢力

が郡外にも及んでいたと考えられる。しかし、この時期は諸氏の間に争いが起き、永享7年(1435)の和賀氏と煤孫氏の衝突が、稗貫、南部、葛西の各氏を巻き込んで激しく戦い、飯豊城(北上市)・湯の館・十八ヶ城(花巻市)・寺林城(石鳥谷町)などで合戦があった。また、弘治3年(1557)には亀ヶ森氏、永禄年中には大迫氏が主家の稗貫氏に背いて争うなどしている。

稗貫氏は、その後居城を十八ヶ城から鳥谷ヶ崎の地に移して本城とするが、天正18年(1590)の小田原城攻めに参陣しなかったため秀吉の仕置をうけ、葛西氏とともに和賀・稗貫の諸氏もこの対象となった。そのため、郡内では新堀城(石鳥谷町)、鳥谷ヶ崎城の二城を残して破却された。

浅野長吉を軍監とする奥州仕置の軍勢は、鳥谷ヶ崎城に本陣を構え仕置と検地を行ない、その後、鳥谷ヶ崎城などに目代を置いて引き上げたが、同年10月に胆沢郡の柏山氏の一揆が起きると、稗貫・和賀の遺臣を含めた大一揆となり鳥谷ヶ崎城・二子城の主城を奪回した。翌19年に九戸政実の乱が起きると、豊臣秀次を総大将とする再仕置軍によって鳥谷ヶ崎城も簡単に落とされ、稗貫・和賀は南部氏の所領となった。鳥谷ヶ崎城には、南部氏の重臣北松斎の次男北秀愛に8,000石を与えて花巻郡代とした。この頃に、鳥谷ヶ崎城を花巻城と改めた。また、新堀城には、葛西氏の重臣であった江刺氏を置いている。北秀愛死去後は、父の北松斎が城の改修と城下町の整備にあたっている。

慶長5年(1600)には、再び稗貫・和賀を中心として争乱が起き、田瀬城・安俵城(東和町)や花巻城でも戦闘があり、大迫氏は伊達勢の支援をうけて大迫城を奪回している。翌6年には、一揆勢の立て籠った岩崎城が落城して当地方も鎮静化した。

その後、要所には代官所が置かれ、新堀城は慶長17年(1612)に東和に土沢城が築かれると同時に廃城となり、江刺氏は二千石を与えられて土沢城に移った。花巻城は南部領盛岡藩の南の鎮台として明治維新まで存続している。

轟木館 花巻市笹間轟木

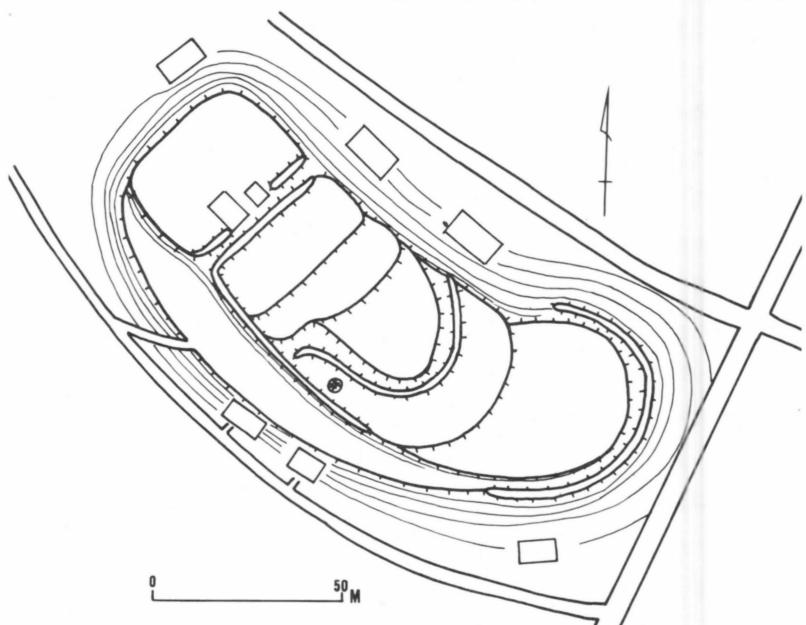
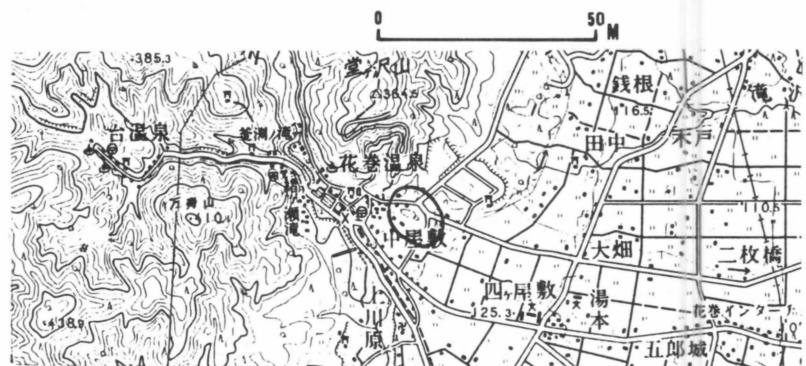
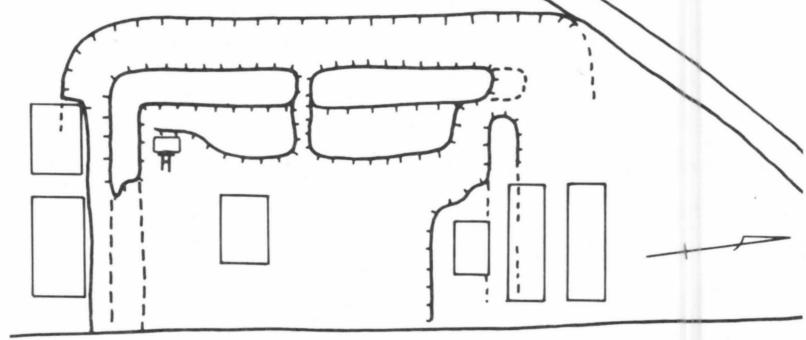
笹間地区の和賀・稗貫を結ぶ街道が交差する地点にあり、館という地名の西側の平地にある。方形単郭の館跡で一辺は100mほどであったと考えられる。平地に築かれているため周囲をめぐる土塁は高さ5m、幅10mほどに達し、さらに外側に水堀をめぐらした跡がみられる。館跡の大半は道路や宅地などで破壊されているが西側と南側の一部には明確に残されている。館内の南西隅には神社が置かれている。館周辺は四方が平野の穀倉地帯となっており、特に重要な地であって宿駅となっていたと考えられる。

館主は和賀氏の重臣轟木氏で、天正の頃は轟木入道月斎と伝えるが、和賀氏没落後は轟木長左衛門という者が南部利直に仕え、天正18年の九戸政実の乱や慶長5年の岩崎一揆に対しても和賀勢に組みせず、南部方として参陣し、七百石を給されている。館の西方にある将軍寺は轟木氏代々の牌所であったといわれている。

大畑館 花巻市湯本大畑

花巻温泉の入口南東方向に延びる尾根にある。L字形になる館であり、尾根の基部を堀と土塁で区画して主郭とし、その下の堀と低湿地をへて東側に折れる二の郭を形成している。二の郭の西側一部から南側にかけては深い堀と土塁で区画している。北側は道跡や宅地によって削り取られているため詳細は不明であるが、やはり堀や土塁がめぐらされていたものと考えられる。この周辺には銭根館、湯の館、湯の高館が数kmの間にあり、瀬川流域を拠点とする主家稗貫氏の北の支城として機能していたものと考えられる。

館主は大畑氏で、「邦内郷村誌」では嘉慶3年（北朝元号1389）に館の西方にある大日堂本尊建立時の大旦那が大畑禪門朝臣時義とあり、「花巻市史」ではこの大日堂本尊の胎内墨書銘は、作風から南北朝時代まで遡ることは難しく、旧本尊を造立した時の文と考えている。なお、永享8年（1436）の騒乱では稗貫郷士として大畑の名がみえ、天正の頃の館主は大畑奎允と伝えている。



本館 花巻市宮ノ目字本館

花巻市街の北約2kmの地点、比高10mの瀬川右岸の台地上にある。遺構として明確なものは堀の一部だけである。堀は東側で、数条の堀が入り組んで並び、最大で幅30m以上はある。南側では1条しかみあたらず、埋められたものと考えられる。東西400m、南北200mぐらいが郭の範囲と推定される。



当館は稗貫郡主である稗貫氏の居館と伝えられ、十八ヶ城に比定されているが、「邦内郷村誌」では「其昔北上川自瀬川本館辺西折流廻十八ヶ城下・愛宕下・瑞興寺寺場北岸」と記され、現在の若葉台小学校付近を指している。また、瀬川上流1.5kmほどの右岸台地にも当館東側の堀と同じ数条の堀状の溝がみられ、しかもより巨大である。このようなことから当館を十八ヶ城と断定はできない。

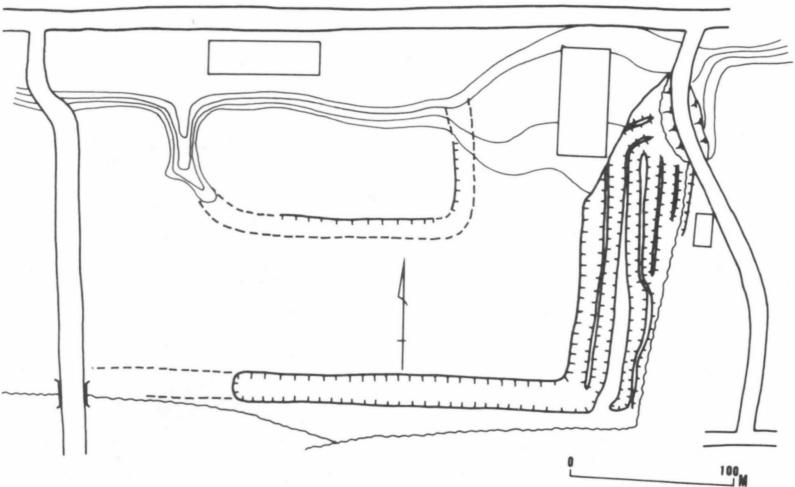
ただ、一時期稗貫氏の居館であったことは規模などからみて間違いないであろう。

「奥々風土記」には稗貫氏は小瀬川から本館（十八ヶ城）、享禄年間（1528～32）に鳥谷ヶ崎城に移ったとある。

花巻城（鳥谷ヶ崎城） 花巻市城内

この城は、北上川に沿って形成された台地が、東方に大きく突出した地を利用した平山城である。花巻城と改称するまでは鳥谷ヶ崎城といい稗貫氏の本城であった。それ以前にも「内史略」、「奥羽永慶軍記」などには、前九年の役の安倍頼時の磐基駆に擬定されている。現在は市街地が広がり、旧城内には市役所・県立高校・病院などの大規模な施設が建ち、住宅街も密集していて、城の形状はほぼ失われている。花巻城在城当初は、城の北側を瀬川、北東を廻って北上川が流れ、さらに南側には豊沢川という、城の三方を河川に囲まれた急崖となっていた。西側は台地続きのため、幅30m以上の巨大な堀で切断し、やや崖の緩やかな南東斜面にまでめぐらしている。江戸時代末期に描かれた「花巻御城郭図」によると、内郭は本丸・二の丸・三の丸とに分かれ、それぞれを広い水堀で区画し、各郭の周囲には土居（塁）と柵もめぐらしている。本丸と二の丸の一部には白壁も見られ、近代的な城郭であったことが窺われる。

本丸には天守閣等は無く、二の丸に郡代屋敷・馬場・御倉があり、三の丸はおもに上級家臣団の屋敷地となっている。大手門は南西端、搦手門は南東寄りに設けられている。とくに、搦手の門は円城寺門と呼ばれ現存している。これは、この場所に円城寺があったためについた名であるが、



元来は和賀氏の居城であった二子城から移築されたものであるという。このような花巻城の造りは、天正19年（1591）に南部信直が北松斎信愛を八千石で城代とし、鳥谷ヶ崎城と呼ばれていたものを改修工事して以後のものと考えられる。

稗貫氏は、鎌倉時代に源頼朝から稗貫郡を給せられて入部し、当初小瀬川館（あるいは瀬川館）に居住したが、つぎに本館（十八ヶ城、絲縷城、または大瀬川館という説がある）に移り、最終的には鳥谷ヶ崎の地に居城したというが、諸説が多く判然としない。ただ、永享8年（1436）の「稗貫状」では、南部勢を支援する薄衣氏が、稗貫氏本城の十八ヶ城攻撃の際、鳥谷ヶ崎に陣を置いたと記されていることから、ここに居城するのは後のことと考えられる。

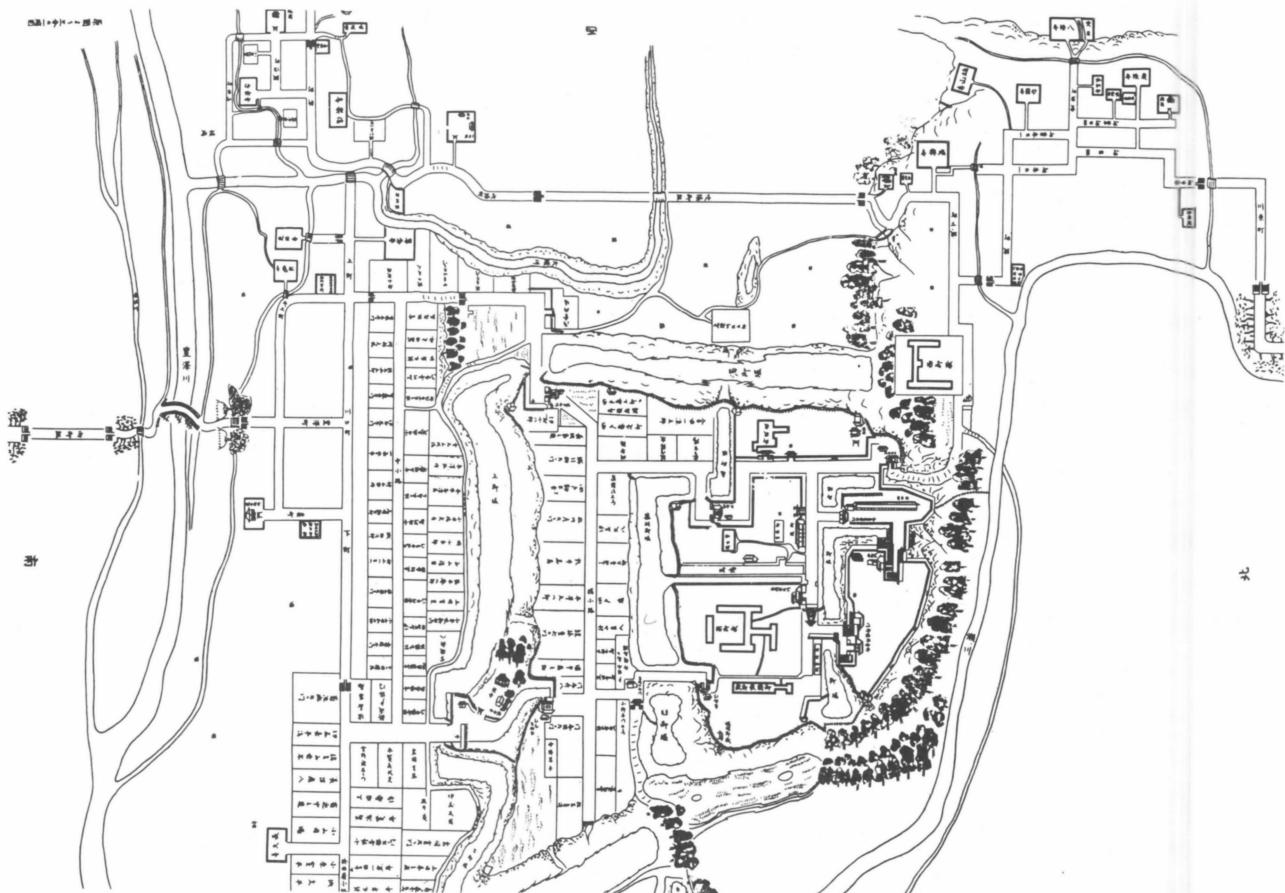
所領は石鳥谷町、花巻市（南部は和賀領）、大迫町、東和町西部に及び、稗貫五十三郷といわれる。各郷には、一族・家臣を置き、諸城を築いていた。

天正18年（1590）広忠の時に、豊臣秀吉の小田原城攻めに参陣しなかったため所領を没収され、鳥谷ヶ崎城には、奥州仕置の軍監浅野長吉が滞在し、家臣の浅野重吉を目代として置いた。稗貫広忠は城を退散していたが、弟の和賀義忠が同族を糾合して浅野家臣の後藤半七の守る二子城を攻めると、これに呼応して鳥谷ヶ崎城を攻め、いったんは

奪還に成功した。天正19年には、九戸騒乱のさいの秀吉の奥州再仕置の軍勢は、難なく二子城・鳥谷ヶ崎城を陥落させ広忠は大崎氏を頼って落ちのびたが、後に江刺郡正法寺で薙髪したという。この一揆後、北秀愛が八千石を賜い、花巻城代として置いて、南部藩の南の主城として、城下町の整備や城の改修を開始した。慶長3年（1598）には北秀愛が死去し、代わって父の北松斎信愛が事業を継承した。しかし、慶長5年（1600）に南部氏が、山形の最上陣に出陣中、再び和賀・稗貫の遺臣による一揆が起き、和賀義忠の遺児忠親が二子城を拠点とした。そして、稗貫氏の重臣根子氏（万丁目氏か）を中心として、北松斎の守る花巻城

を攻撃した。北松斎は、城内にいた13名の士卒と婦女子だけでこれを防いだが、二の丸・三の丸と侵入され、本丸での攻防をくり返すうちに、北十左衛門が応援にかけつけて一揆軍を退散させた。一揆軍は、後に和賀町岩崎の岩崎城に立て籠ったが、慶長6年、南部利直によって平定された。

北松斎は、花巻城と城下を整備し、慶長18年（1613）に死去したため、南部利直は長子彦九郎政直に和賀・稗貫の地から二万石を分けて花巻城主とし、伊達藩境の監視を行わせた。しかし、政直には嗣子が無く、寛永元年（1624）にはさらに城代を置き、以後明治維新まで存続した。

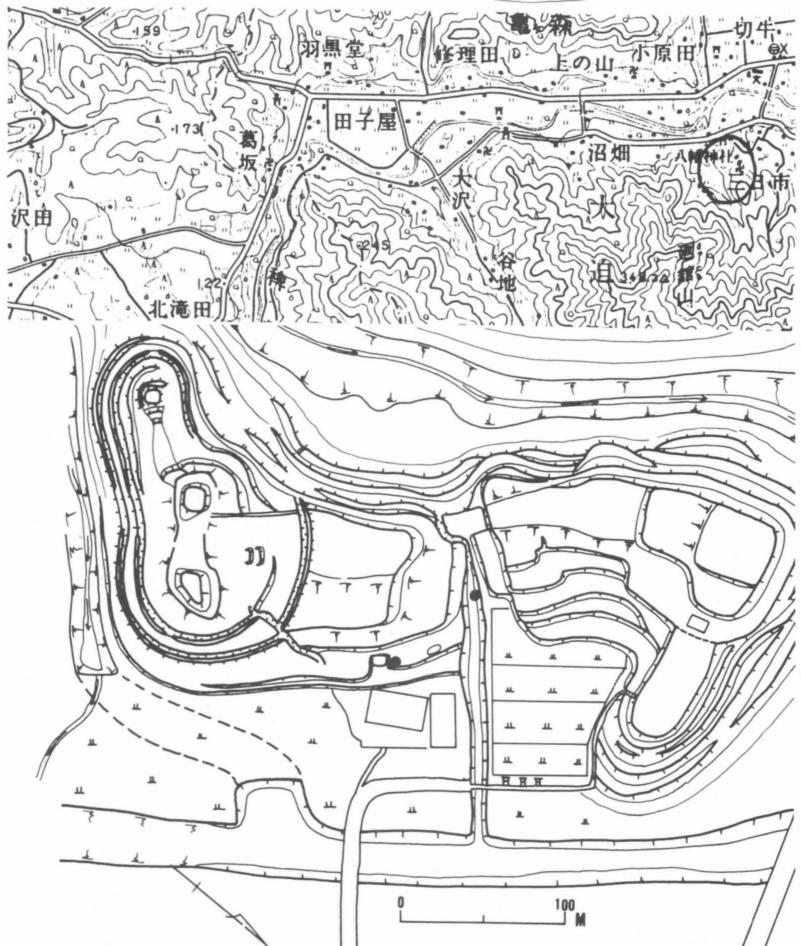
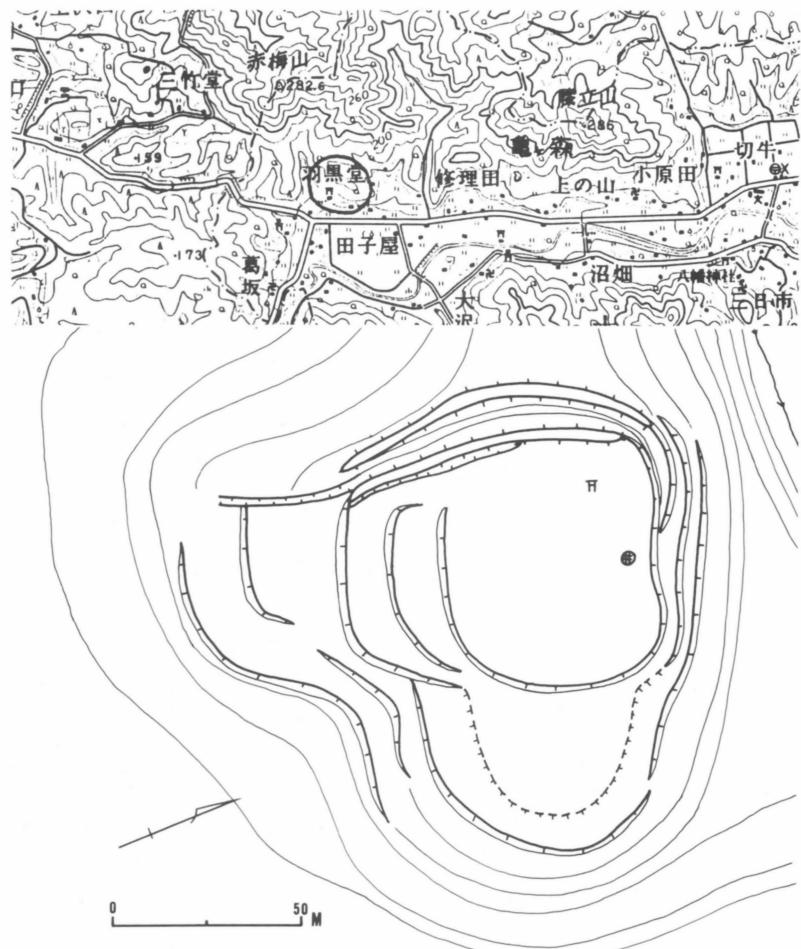


御所が館 大迫町亀ヶ森字羽黒堂

亀ヶ森地区の三つないし四つの集落を総称して衣更木の里といっているが、その西端の羽黒堂集落の東側の丘陵に館跡がある。比高は約40mで、尾根続きを上幅10mの堀と二重の土塁で断ち切っている。主郭と二の郭とかなっていたと考えられ、主郭は70m×55m、二の郭は現在ぶどう畠として整地されているが30m×40mほどの規模であったと考えられる。尾根続きを以外の三方は帯郭が数段めぐらされている。稗貫氏の家臣衣更着掃部の居館と伝えられているが、同じ稗貫氏の家臣亀ヶ森図書に攻められ没落したといわれる。付近には館、馬場などの名が屋号として残り、殿様の畠であったという殿畠木という屋号もある。また、稗貫川を隔てた向側には五十石取りの侍がいたと伝える廻館という館跡がある。なお、近くの御堂鼻といわれる台地に貞治7年と記銘のある碑が残り、衣更木氏ゆかりのものと伝えるが確かなことは不明である。この地も台地周辺に空堀をめぐらした跡が残っている。

亀ヶ森城 大迫町亀ヶ森字八幡館

権現堂山の尾根が東北に延びて稗貫川の河谷に突き出た末端の八幡館山にある。比高は約30m、主郭、二の郭、後防備の郭とに分けられる。主郭は60m×75m、二の郭は70m×30mほどの規模であるが、主郭と二の郭の間には深い堀で切断されていた。主郭と後防備の郭を結ぶ尾根も堀で切断している。後防備の郭は尾根沿いの進入を防ぐためにつくられたものと考えられ、亀ヶ森という山の周囲に二重の堀と土塁をめぐらし、頂部には何らかの建物があったと思われる平坦地が残っている。また、館の下方には沢の水を利用した水堀がめぐらされていたというが、その痕跡が水田の中に若干みられる。この館は当初稗貫氏の家臣八木沢外記が居館していたが、八木沢氏没落後亀ヶ森図書光広が代わって館主になり、その後代々亀ヶ森氏が居館したと伝わる。主家の稗貫氏が滅びた後も南部氏に仕え、七百石を領している。館の東方には三日市という地名があり、また、上家敷、鍛冶屋敷、上宿、中宿、下宿などの地名も残っている。



大迫城 大迫町内川目古館

大迫市街より東方に約2km、稗貫川左岸の山陵上にある。平地との比高は約120mで主郭と二の郭とに分けられる。主郭の平坦部は東西50m、南北75mで北東よりに整地した時のものと考えられる盛土がみられる。二の郭は主郭よりも15~16mほど低く、平坦部の広さは東西40m、南北75mである。現在は明治に建てられたという稻荷神社があるが、その後方に21m×12.5mの長方形の土壇があり、ここに神社あるいは物見台があったものと思われる。主郭・二の郭の北・東・西は沢や岳川に向う急崖となっている上、数段の帯郭をめぐらしている。特に二の郭から主郭までの斜面には階段状に堅固に造られている。また、北側と西側斜面には堅堀と考えられる溝もみられる。井戸は主郭と二の郭の間に谷地状の凹地があり、跡が今でも残っている。

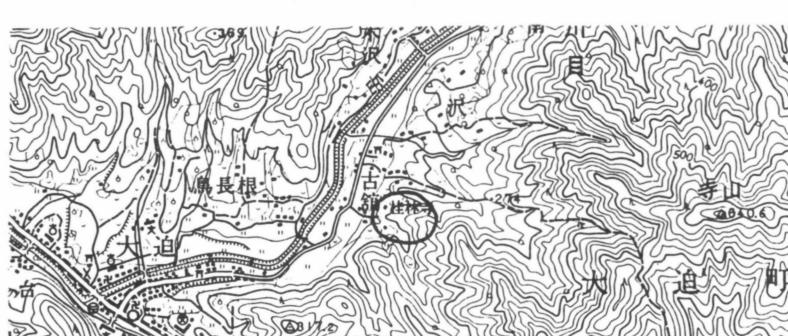
この城の弱点は尾根続きとなる南側であるが、堀切によって切断し、中央部には土橋が残っている。この尾根も両側が急峻な馬背状のもので、尾根の突き当たる標高440mの高地には50~60m四方ほどの詰の城と思われる平地がある。また、西方の市街へ向う尾根の端にも与五助館・中居館と呼ばれる館跡が、中世の街道筋をはさんで築造されている。これらは大迫氏一族のものと伝えられており、大迫城の一角をなすものであろう。

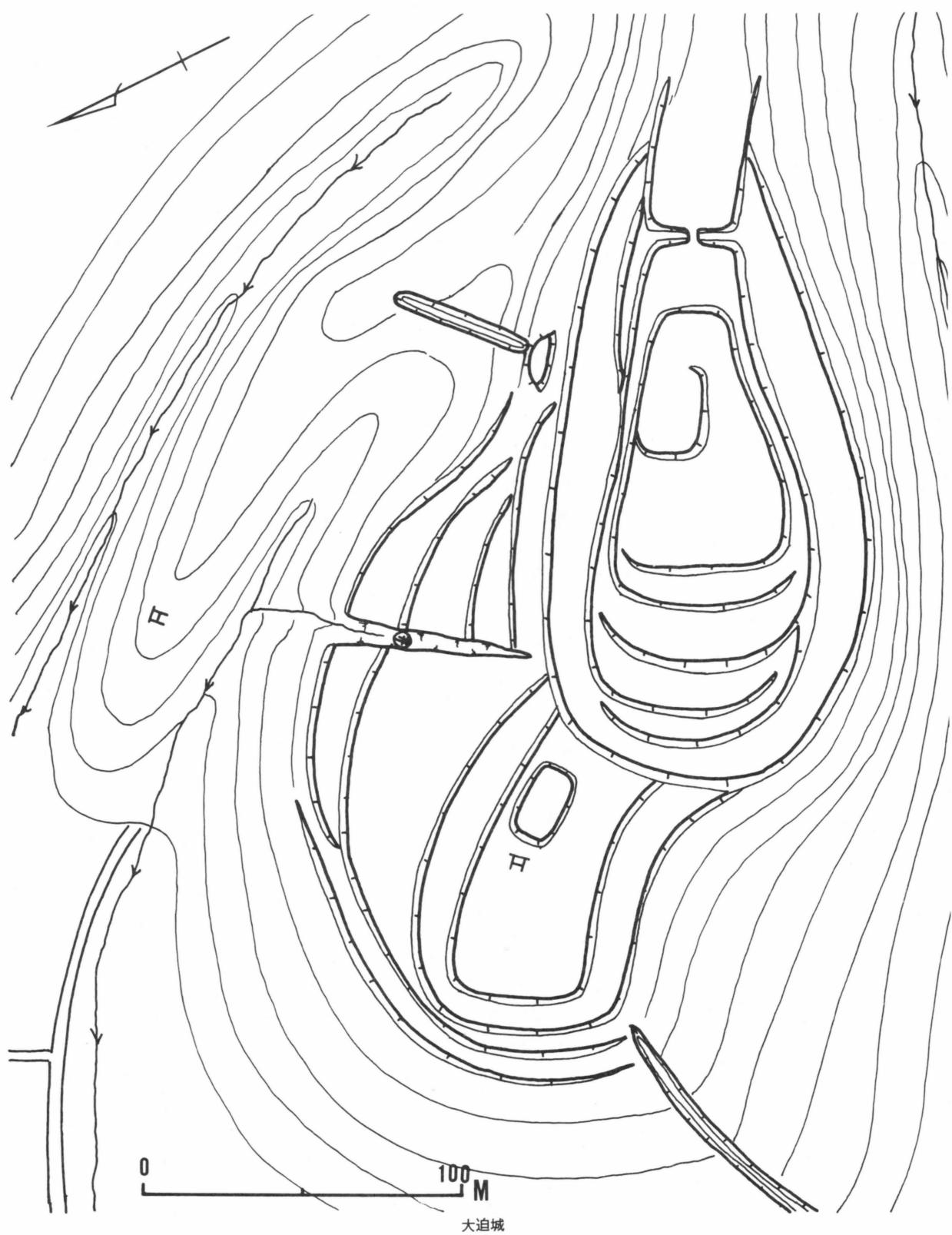
築城年代等は不明であるが、代々大迫氏の居城といわれる。大迫氏は稗貫氏の始祖大和守広重の子である大迫常陸守重真を祖とすると伝えられる（瀬川稗貫系図）が、その後は明確ではない。永禄年中に主家稗貫氏に叛き、十二丁

目氏の軍勢に攻められるが、逆にこれを打ち破っている（参考諸家系図）。和賀氏、江繫氏とも姻戚関係があった。天正年間の城主は大迫右近（幼名又太郎）であり、九戸政実と行動を共にしたりしている。天正十八年の豊臣秀吉による奥州仕置によって主家稗貫氏と共に没落し、又三郎、又右衛門の二子を連れて江刺の人首に逃れたが病死した。その後、大迫の地は田中彦右衛門に預けられ、甥の藤四郎が大迫城の北西2kmにあった天神館に居住していた。大迫兄弟は慶長五年の和賀・稗貫一揆に乗じて家臣を集め、伊達政宗の鉄砲隊の支援を受けて天神館を攻撃し、藤四郎以下を打ち取って旧領を奮回した。しかし、南下してきた乙部氏を中心とする南部勢のために敗走した。翌年、大迫兄弟は岩崎一揆に加担し、又三郎は戦死、又右衛門は南部に降ったが処刑され、ここに大迫氏の嫡系は絶えた。しかし、天正十八年の南部四十八城注文に「大迫城、山城、破却、代官九日町十郎兵衛」とあり、大迫右近の弟十郎兵衛（聞老遺事）と考えられるため傍系は存続したのであろう。

なお、城の北麓に曹洞宗の桂林寺があり、永禄八年に大迫氏の被護でこの地に移転されたと伝えられ、大迫兄弟が伊達政宗の書状の「そつたく吽啄」の意味がわからず桂林寺三世の梵玖和尚に尋ねたという。城跡周辺は古館という地名が残り、上小路・下小路と呼ばれていた。また、屋号には城ノ内、城口などがある。

伝説では白米城伝説、金鶏伝説、うるし万杯伝説など数多く残っている。





大瀬川館 稗貫郡石鳥谷町大瀬川字館山

石鳥谷町の中心部から西方へ7.8km、葛丸川流域の水田一帯を一望できる「館山」一帯に大瀬川館がある。規模は大きく、東西300m、南北400mに及び、北上川西岸地帯ではもっとも大きな館跡の一つである。中心となる郭の標高は178.1m、東方下位の水田面との比高は30mである。

空堀と土塁に囲まれた五つの郭から構成され、北西の一の郭がもっとも広く、これより小さい二の郭・三の郭が段状に続き、さらにその東西の二郭によっている山城である。

東北自動車道建設に伴い、一の郭・二の郭・三の郭の主体部の発掘調査が行なわれ、最盛期が16世紀中頃と推定される中世後半の館であることが判明した。

三つの郭をめぐる空堀と土塁は、急崖をなす北側を除いて三方をめぐっている。一の郭と二の郭の間の平坦部から古い空堀が発見され、はじめは一の郭と二の郭の二郭によって構成されていたことが判明した。この空堀が埋没しはじめた頃には、古い空堀に平行するように新しい空堀と土塁が築かれる。一の郭と三の郭をめぐる空堀の長さは264m、北西は二重の堀となっているため、上幅20m、深さ6.5mの堅固なものである。堀の断面はV字形となる薬研堀で、堀り上げた土は空堀の外側に積み上げて土塁としている。三の郭の空堀では西側に土橋が見られる。

内部施設は一の郭にもっとも多く、西辺の中央部と東南端に登り道と門跡、建物の境界や排水のための溝が8条、掘立柱建物跡47棟、竪穴式建物跡6棟、カマド状の焼土遺構、井戸跡などが発見された。

南東端の門跡は、一対の門柱が建てられ、冠木門や棟木門と推定されている。間口は2.42mで、門柱からは左右に柵列が設けられているが、登り道に接して八の字状となって郭の縁辺に沿って続いている。南辺では空堀の底面から6段の階段がつくれられ、東西二対の門柱の間に通じている。柱穴が大きいことから、南辺のこの地が大手門とも考えられる。

建物は郭の縁辺の竪穴式のほかはすべて掘立柱であり、南東端の門跡から中央部までの通路をはさんで西側に建てられた小さい建物群と、中央部から北西寄りの規模の大きい建物群とに分けられる。規模の大きい建物は主屋と考えられ、5回以上の建て替えが行われている。建物の配置は南または東向きで、これに2~3棟の付属建物をもち、倉庫と考えられる数種の建物もある。

主屋と考えられる建物では、東西9.42m 5間、南北14.65m 7間が最大であり、3~4面に廂のある建物である。柱穴は径20~40cm、深さ30cmほどの円筒形で、柱脚は径25cm以下の円形である。一棟の建物には桁行・梁間方向でそれ

ぞれ4~5種類の柱間があり、1間の長さは6.5~7尺として設計されている。間取りは、桁方向に2~3分され南側には梁行3間・桁行2間の座敷とみられる部屋があり出入口や厨房の推定される建物も含まれている。また、柱数からは板敷のある建物であり、板葺や茅葺屋根の寄棟造りと想定されている。

主屋に付属する建物は、梁行2間・桁行5間を最大にして、主屋の西側に多い。郭の中央部から東にかけては梁行2間・桁行4間以下の小さい建物で、大小にかかわらず切妻造りと推定される。これらは、倉庫や廐、作業用施設などが含まれていると思われる。

小規模な付属建物がある郭の中央部以東からは、14棟の竪穴式の建物跡が発見された。方形または長方形状に竪穴を掘り、さらに壁際に掘立柱を建てる建物や、一方を出入口用に張り出して掘りこんだものもある。建物の規模は、梁行1間・桁行2~3間の建物が多く、穀類を貯蔵したとみられる梁行2.91m、桁行7.85m 5間の倉庫跡が最大である。建物方向は、いずれも掘立柱の建物方向と同様であり付属する施設と考えられる。

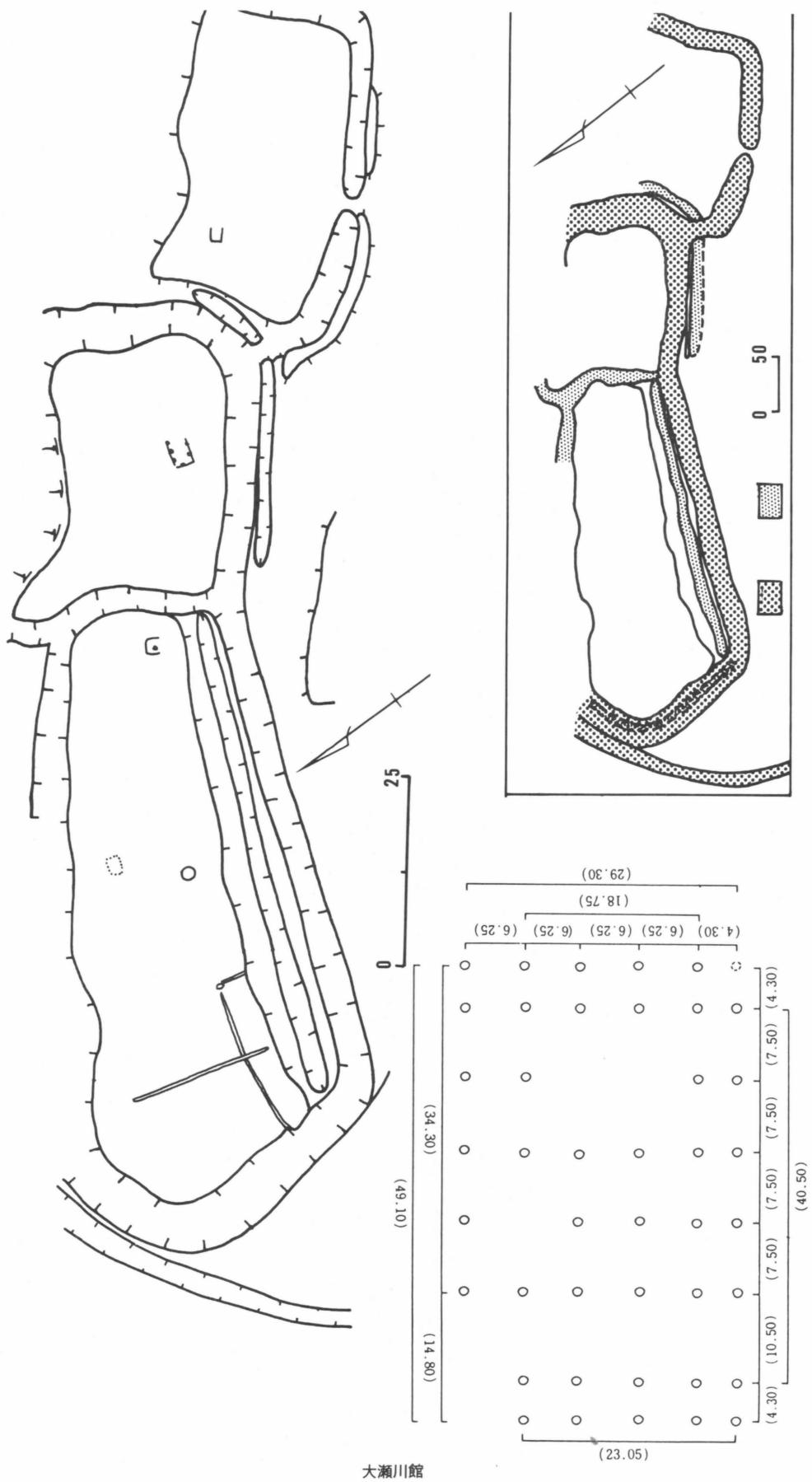
その他には、カマド状の焼土遺構や井戸が発見されている。舟底状に掘り込まれた焚口から燃焼部、くり抜かれた煙道が続いている。井戸は円形に地山に掘りこんだものである。

二の郭・三の郭等には、掘立柱建物・竪穴式建物があるが、いずれも規模が小さく、付属の建物や家臣の建物であったと推定される。

出土した遺物は、小刀・鉄鎌などの武器類、鉄斧・釘・板材などの木工・建築具、灯明皿・手洗鉢などの日常用具類、鍋・石臼などの調理具、碗・皿・盃など陶磁器の食膳具、茶入れ・茶碗などの茶器、米・麦などの穀類、中国・朝鮮からの渡来銭などがある。陶磁器類がもっと多く、碗・皿類は中国産の青磁・白磁・染付・赤絵などの磁器類が中心で、また国内産の陶器には茶入れや茶碗が含まれる。

館主は「邦内郷村誌」によれば、畠山重忠の弟重宗の子孫とあるが明らかではない。稗貫氏の時代は、斯波氏の押えの城として境界守備の性格が強かったものと推定される。天正年間には、瀬川隠岐守の居館であったと伝えられている。





大瀬川館

小森林館（小森館） 稗貫郡石鳥谷町字小森林

本館は、明確に確認できるだけでも、その規模東西300m、南北400mほどの広大な台地を占め、比高は約8mの平城である。北郭と南郭とに分けられるが、北郭が大部分を占め、東西×南北それぞれ300mの規模である。この郭の内部は、北東部を東西100m、南北150mほどに区画する堀と土塁が築かれています、中には子守觀世音の祠があって、また石碑も見られる。

北郭の北方下位を流れる滝沢川は、往時は館下を蛇行しながら流れ、東側を画するように南流していたものと考えられる。北郭と南郭の間・南郭の南方には、それぞれ沢が開析し、合流して滝沢川に注いでいる。この川と沢で区画された台地の西側は、地続きのため幅の広い堀でそれぞれ切斷している。館の北東から東方側面にかけては土塁が見られないが、北郭の内区画した場所から西側の堀まで、高さ1.4～2mの土塁が築かれ、北郭の南側まで逆コの字状に続いている。西側の土塁はとくに保存状態が良く、堀の外側にも認められ、堀の北端から中央付近まで残存している。ここには土橋があり、郭の内側では広く土塁が切れているため門跡であったと考えられる。南郭では、土塁が西側に構築された堀に沿って認められ、堀の外側の一部にもある。

北端に近いところには土橋が造られている。



北郭の南東は国道4号線によって切られているが、北郭の続き部分と思われるものが4号線東方に宅地となっている。また、南北の郭の堀切の西方も平坦部であり、土塁等もあることから、西の郭の存在が考えられるが、現在は開田されて水田となっており不明である。

館の周辺には、直町・鍛冶屋敷・小森館の地名が残り、館の北方には、稗貫の名に関係したとみられる稗努業神社がある。

小森林館の館主は、「郷内郷村誌」によると治部少輔とみえ、「稗貫郡旧記」には稗貫の老臣小森林大隅守の居城で、天正の頃の主を治部少輔と伝えている。築城時期は不明であるが、永享7～8年（1436～1437）の稗貫・和賀地方の兵乱の際には小森林治部少輔が稗貫の士として参加しているため、この頃にはすでに居住していたものと考えられる。

天正18年（1590）の和賀・稗貫一揆中の人物に小森林治部の名があり、「稗貫家譜」では稗貫氏滅亡を記した後に、稗貫の従士の一人に小森林大隅の名が出てくるため、あるいは治部と大隅は同一人物であるかもしれない。

この館は規模が大きいが、南部四十八城破却の際には名前が見えず、それ以前に破却されていたものと考えられる。

新堀城 石鳥谷町新堀字桜野

城跡は北上川東岸の沖積地に張り出した山陵頂上にある。北、西、南の三つの郭による複郭で、周囲を幅6mほどの堀で南西の新仙寺側を除いて馬蹄形状に区画している。南の郭が最も高く、標高183m、比高80m以上となる。周囲には数段の帯郭をめぐらしている。また、南郭には「跡石」と称する巨石があり、守護神の稻荷社が安置されていた跡とされたいたが、後に新仙寺境内に移転された。

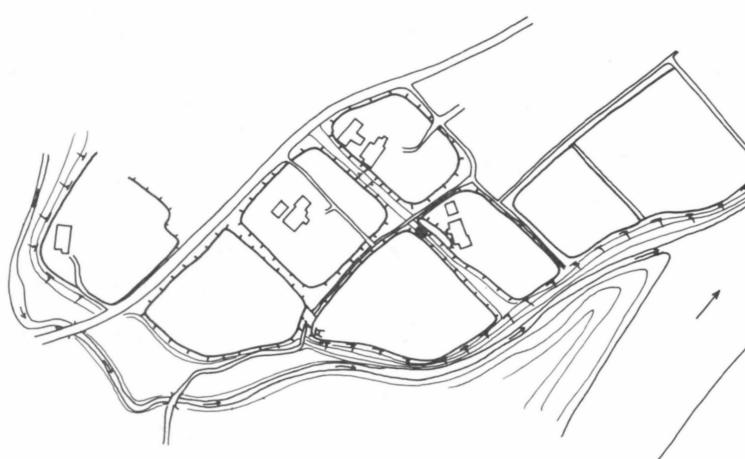
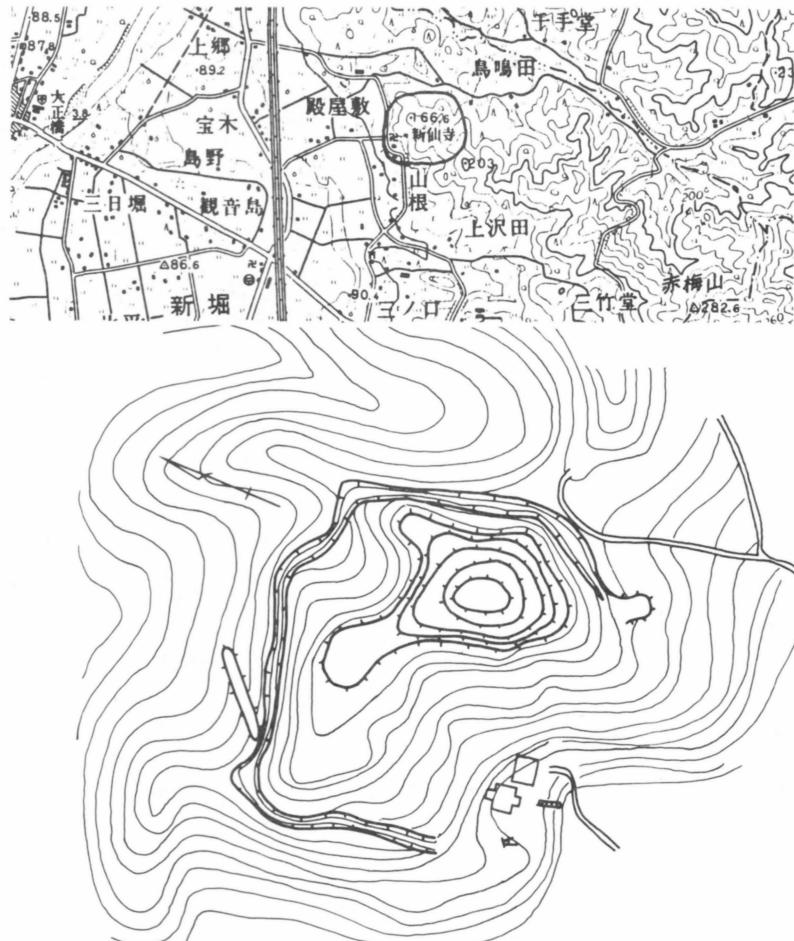
当城は稗貫氏の家臣新堀氏の代々の居城といわれるが、稗貫氏の滅亡によって一族離散し、最後の城主である新堀作兵衛義広は南部氏に降って二百石を給されたという。

天正19年には前田利家の家臣内堀四郎兵衛の領地になり、南部四十八城破却の際には江刺兵庫隆直の持分となって存続している。これは、北上山地方面から侵入する敵に対しての要所であることからの配慮と考えられるが、伊達藩境には遠いため、慶長17年に土沢城が築城されると江刺氏が移転し、その後は廃城となったものとみられる。

八重畠館 石鳥町八重畠字宿

館跡は二郷川と北上川とが合流する左岸段丘上にあり、宿と呼ばれる地域である。二郷川の急崖に沿って複数の郭に分けられた連郭式の館跡である。南北に走る幅7m、深さ7mの堀が約98mにわたって残っており、一部には土壘も残存する。往時は本丸、二の丸、三の丸、出丸、牢舎、学問所、馬屋などの郭に分かれていたと伝えるが、現在は宅地や開田のため明確にすることはできない。堀の付近には古井戸があり、堀で区画された郭をつなぐ土橋も数ヶ所に残っていたという。

館主は永享年中に稗貫家の執権八重畠豊前守という者の勇戦が伝えられているため、当館の築城はそれ以前で、代々八重畠氏が居城していたものと考えられる。元亀2年（1571）の斯波・南部氏の境界争いには八重畠氏が調停役を勤めていることから稗貫一族中でもかなりの重臣であったと推測される。天正中は八重畠掃部の名がみえ、主家の没落によって廃城となった。館付近には、宿、内館、枡形、馬場田、下宿などの地名が残っている。

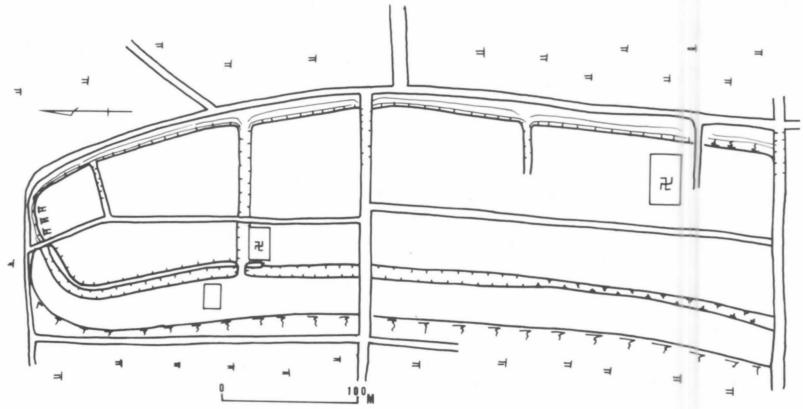


安俵城 東和町安俵

安俵本町の地区にあり、東流する猿ヶ石川が南方に流れを変える右岸段丘上にある。南北三郭からなる連郭式の平城で各郭の周囲は深い堀と土塁で区画している。館小路、館、本町・古館の地名が残っている地区が中心郭と考えられる。館の西側と北側には高さ2mほどの土塁が一部に残っている。南側の郭には高橋という屋号の家があり、橋がかけられていたと伝えられている。北の郭の北隅には館上神社が建っている。



城主は和賀氏の支族安俵小原氏で、和賀家四天王家の中に入れられている。最後の城主は安俵玄蕃頭忠秀であり、和賀・稗貫一揆に主謀者の一人として加担し自刃した。安俵城は天正20年の南部四十八城注文に「安俵、平城、破却、信直抱代官中野修理」とあり、代官が置かれていたが慶長5年に葛西氏の遺臣を中心として安俵城を攻めた時には、「奥南盛風記」には江刺家の家臣原体主膳が守将として居城していたと伝えられている。

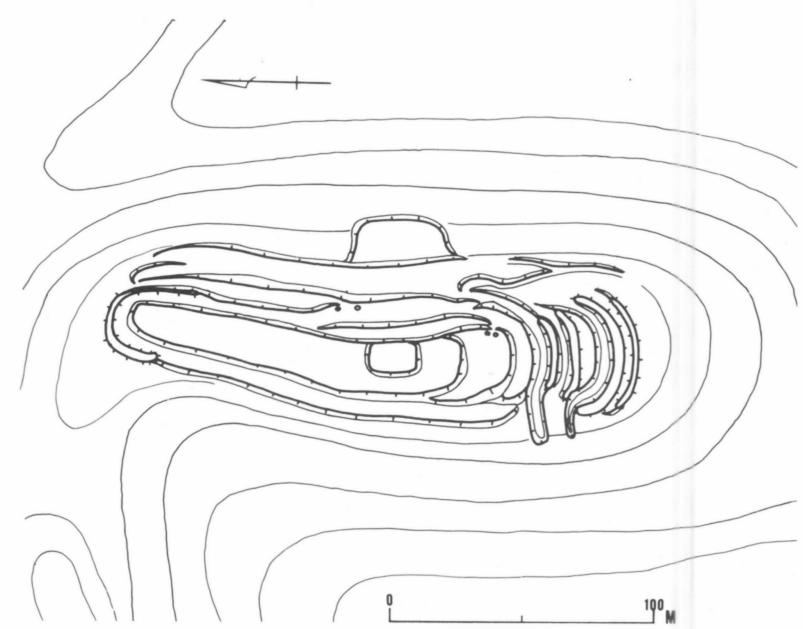


毒沢館 東和町中内字毒沢

毒沢集落の西方、比高約50mの小高い山の頂部にある。郭の中心部は37m×24mの長方形をなし、二段に分けられている。その周囲には最高20mに達する幅の広い郭が三~四段にわたってめぐらされている。四方に延びた尾根は北方のものを除いて深い空堀で接続している。平坦地が非常に丁寧に造られていることなどから構築年代は比較的新しいものと考えられる。また、北方の尾根続きの頂部にも平坦地と幅の狭い帯郭がめぐっており、毒沢館の一部とみられる。毒沢集落にはさらに東方に宿館と呼ばれる独立丘陵があるが、ここには館跡らしき遺構はない。

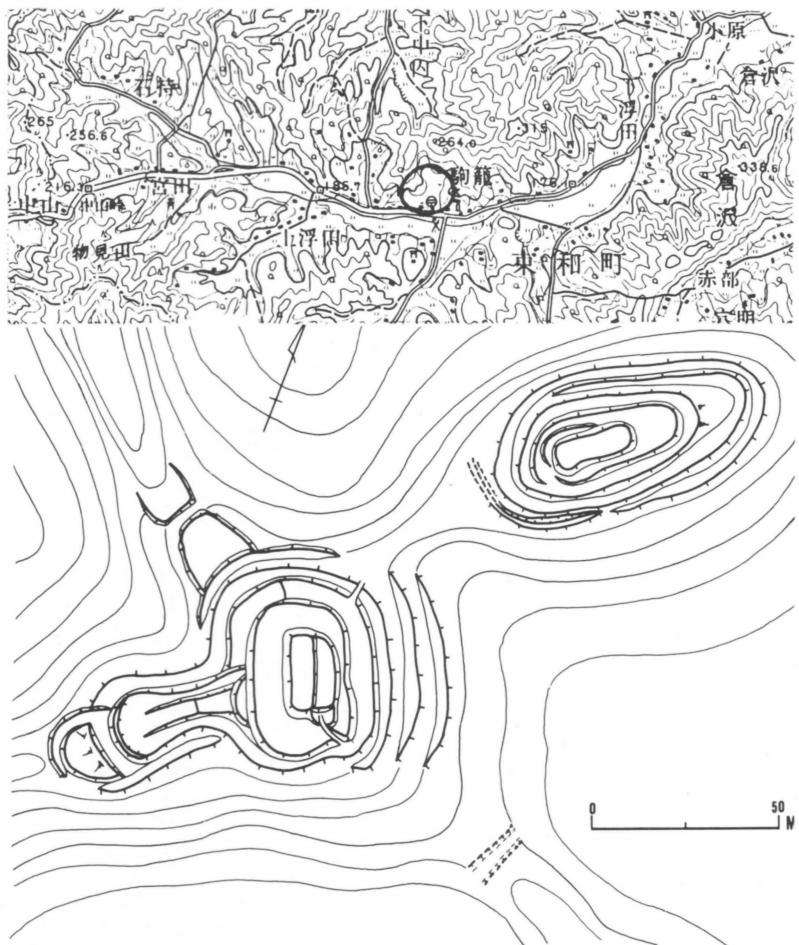


館主は毒沢氏（多田姓）といわれ、和賀氏の支族である。天正九年の「和賀御分限録」に毒沢伊賀の名があり、和賀・稗貫一揆の際にも加担し、後に伊達政宗に仕えている。伊賀のむすめは伊達政宗の側室となり、伊達兵部少輔宗勝（一ノ関城主）を産んでいる。毒沢氏はその後姓を只野に改めた。



車館 東和町上浮田

上浮田集落の北側山陵上にあり、比高は約65mである。頂部の平場は南北107m、東西20mと南北に細長く伸びている。この頂部南寄りに18m×9mの一段高い場所があり、何らかの建物跡と考えられる。北方の尾根続きは上幅6~7m、深さ3mほどの堀と外側に土塁を設けて区画し、東西には帯郭がある。集落寄りの南側斜面は四つの空堀と土塁で特に堅固につくられていて、そのうち二本は東側斜面に堅堀状に伸びている。また主要部の南西と西側の帯郭に礎石が残っている場所があり、門などがあった可能性が強い。浮田地区は東和町の南西端にあたり、北上、江刺へ接する交通の要所である。和賀氏の家臣浮田佐兵衛の居城と伝えられているが、以前は浮田地区を大郷と称したこともあるらしく、安俵小原氏の支族である大田氏が居城していた可能性もある。



土沢城 東和町土沢

城跡は東和町土沢の町並北側の高台にある。この地は伊達藩との境界線に近いため、南部藩と伊達藩との間でたびたび争乱があった。慶長五年には伊達勢に安俵城、田瀬館などを攻撃された。南部利直は伊達領の口内に浮牛城が築れたことに対応して、戦略要地として当城を築城した。城跡前面を大河である猿ヶ石川が東流していることも防備上有利であったと思われる。

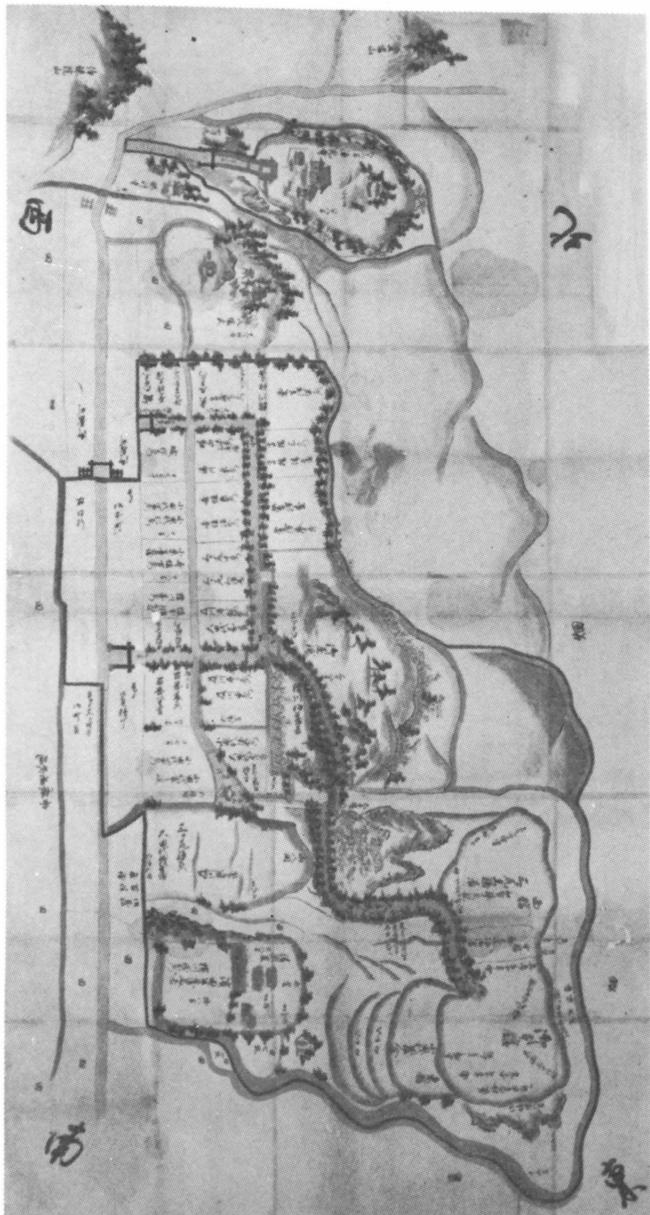
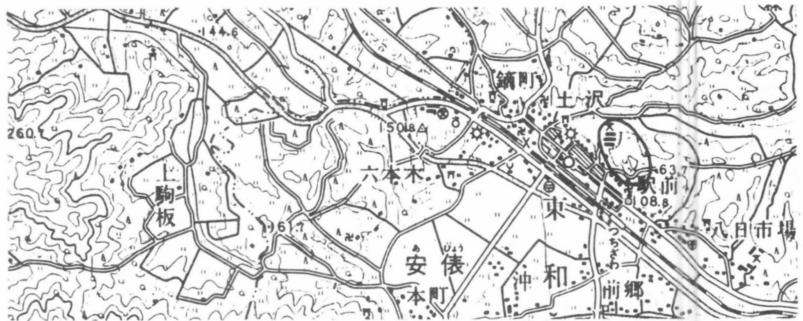
城は慶長十七年に南部藩の野田内匠の繩張りによって築城された。天明元年（1781）の「和賀郡土沢古館絵画」によると、御本館（東西三十四間、南北三十五間）、中館（東西九間、南北十八間）、西館（東西三十四間、南北十四間）、東館（東西十二間、南北十四間）のほかに本館の東隅に一郭（東西十七間南北十間）、中館の東部に大手桜丸や齊雲郭などがあった。各館の区画は幅六間の堀をめぐらし、東北の山手の稚部川から土中に樋を通して引水して水濠としていたと伝えられている。

土沢城のある高台の中段は削平して御屋敷や上級家臣の屋敷が建てられ、平野部には城内小路（家臣屋敷）足軽屋敷、町民の屋敷などが並び城下町が形成された。

最初の城主は慶長十八年に新堀城に居城していた江刺隆直で、二千石を与えて移駐させた。江刺氏は葛西氏の配下の江刺城主で七万石の禄高を持っていたが、小田原城攻略に参加しなかったため領地を没収され、南部氏に従って行動していた。葛西氏の重臣であったことから葛西氏の遺臣や伊達藩の動きを監視するためには最適任者であった。慶長十九年の大阪の陣にも動員されていないことからも土沢城の守備の重大さが認識される。

当城も伊達薄との境界が落ち着く南部重信の代には不要となって破却された。寛文十年（1670）の総検地に際して取り払われたといわれる。江刺氏も土沢城時代三代、破却後城内小路を統治所として七代続いたが、御家騒動によって天明元年に断絶した。

なお、土沢城付近にあったという中世の十二鑓館は位置が不明である。



(四) 北上・和賀地区概観

北上・和賀地方とは、北上川本流域に注ぐ東方の猿ヶ石川流域の一部と、西方の和賀川流域全域を含み、かつての和賀郡である。郡制は弘仁2(811)年に成立し、平安時代後半は安倍・清原・藤原三氏の伝領「奥六郡」の一部であった。

「前九年の役」においては、安倍五郎正任が黒沢尻柵に拠ったことが『陸奥話記』に見える。この柵跡については、北上市黒沢尻川岸の安倍館とされ、周囲には戦場であったとの当時の伝承も残されている。しかし、区画整理等に伴う発掘調査では平安時代の遺構・遺物は発見されていない。また、同川岸には「方八丁」という地名もあり、古代城柵の可能性も考えられてきた。しかし東北新幹線等の発掘調査においてもその確証は得られず、安倍館とともに宅地化されつつある。

源頼朝の奥州攻めによる和賀郡の処理については明らかでないが、諸系図からすれば、稗貫郡とともに鎌倉御家人の中條に広く宛われたと推定される。すなわち、稗貫郡の地頭に補任されていた中條義勝の次男義季は、宮城県刈田郡の地頭に補任され、和賀郡にはこの義季長男の義行とその弟小田嶋義春が下向しているからである。和賀郡下向は承久の乱後の西暦1230年代前後と推定され、その地も北上市更木町梅ヶ沢とも、同黒岩岩崎ともいわれるが不明な点が多い。しかし、地形や歴史的環境からすれば、黒岩岩崎の可能性が考えられる。

初代義行は仁治4(1243)年に没しているが、次男行時には北上市立花・口内方面、三男景行には和賀町一帯と江釣子村西部方面、長女には東和町安俵方面、二女には江釣子村東部と北上市黒沢尻方面を与えて分割相続させている。

一方、弟の小田嶋義春や家臣の所領については、北上市更木方面に重臣の小原氏や八重樫氏が代々繁栄しているし惣領泰義の次男から分かれたと推定される鬼柳氏が和賀川下流の北上市鬼柳一帯を占めているので、義春の所領は北上市飯豊方面か、西和賀の湯田・沢内地方と考えられる。

以上の所領分割は「鬼柳文書」を中心とし、鎌倉時代以降の諸氏の動向から考えられるわけであるが、その後の城館の増加はこうした初期所領域を基盤として展開していくわけである。

和賀郡全域の中世城館は大小150ヶ所近いと推定されるが、発掘調査例は7例にすぎない。したがって、未だに文献や外観から類推せざるを得ないが、鎌倉時代の状況についてはまったく不明である。和賀氏の下向地と考えられる北上市黒岩元館などがその頃のものかとも考えられるが、

確証がない。

ところが、「鬼柳文書」によると、和賀町の須々孫城、同岩崎楯、北上市と江釣子村の三田、糖山、鳩岡崎、あるいは義綱楯といった城館が明らかで、南北朝時代に入ったとたんに相当数築造されている。史料の内容からすれば、これらは郷地頭級領主でも上級者の手になったもので、初期所領分割の狙い手であった和賀氏の系になるものによると推定できる。またこれらの位置環境からすれば、彼等居館の防塞化であったり、新規の立地であったとしても、戦術上重要な交通路を扼する程度で、実際は当時の開発条件と未分離な形で構えざるを得なかったと考えられる。

発掘調査によって南北朝時代に遡るであろうと判断されたのは、北上市鬼柳の丸子館である。島状の和賀川右岸段丘に構えられた鬼柳氏の居館跡であるが、発掘結果から考えて15世紀代に入ると主郭前面に帯郭をめぐらし、島状台地の外に外郭を設けたようである。

また、北上市黒沢尻の安倍館からも15世紀代の天目茶碗と摺鉢の破片が出土している。この館跡は、自然堤防上に構えられ、構造は単濠単郭と推定されるが、北上川水運といった経済的側面も考慮されねばならない。

『聞老遺事』の「稗貫状(永享7、1435年)」によれば、15世紀代の城館は、かなり要害地のものが多く、また、和賀氏本城も北上市二子に築造されていたらしい。おそらくは和賀宗家の郡領主化が進み、家臣達もそれによって安堵された所領地の居館を整備し、諸城(山城)を構えるなど防備を重くしていったものと考えられる。また、城下は宿と呼称されたらしい。

つぎに、16世紀代を盛時とする発掘調査例に、北上市鹿島館跡がある。この鹿島館は丸子館から移った鬼柳氏の居館で、そのプランには改築や拡大過程が認められ、鍵状堀、土橋など、丸子館に認められない遺構も存在する。

こうした平城構造の変遷については、和賀町上須々孫館においても認めることができる。また、二子城の場合も、盛時は16世紀代にあるが、居館をもっとも要害の地に構え背後に詰城を置き、重臣から平侍までの家臣屋敷を配し、さらに北面に寺院を置くといった戦国領主ならではの総構えである。

この和賀氏本城を中心とする防備的支城体制がどの程度整備されていたかは明らかではないが、天正9(1581)年という「和賀御分限録」の家臣団分布からすれば、北上川沿いにかなり徹底されていたと考えられる。ただし、西和賀地方にはほとんど及んでいなかったようである。

すなわち、北上市成田館や同相去鶴野館などは、和賀領の境の城、その間の城館は繫の城として性格が考えられるが、和賀町の須々孫城や、沢内村の典膳館、八幡館などは和賀氏に属さぬ独立性の強い地域ごとの拠点的城館であったと推定できるからである。

和賀町の岩崎城も、二子城同様に平常居館と台地の詰城に分離している。ただし、岩崎城のそれは慶長5（1600）年の和賀一揆後改造され、柏山氏が藩境警備に配備されて以降の可能性があり、東和町の土沢城、北上市口内の浮牛城とともに検討すべき課題である。城下を含めたこれら近世城館の計画的総構えとの対比は、中世城館をより明確にするからである。

相去城 北上市相去町字山根

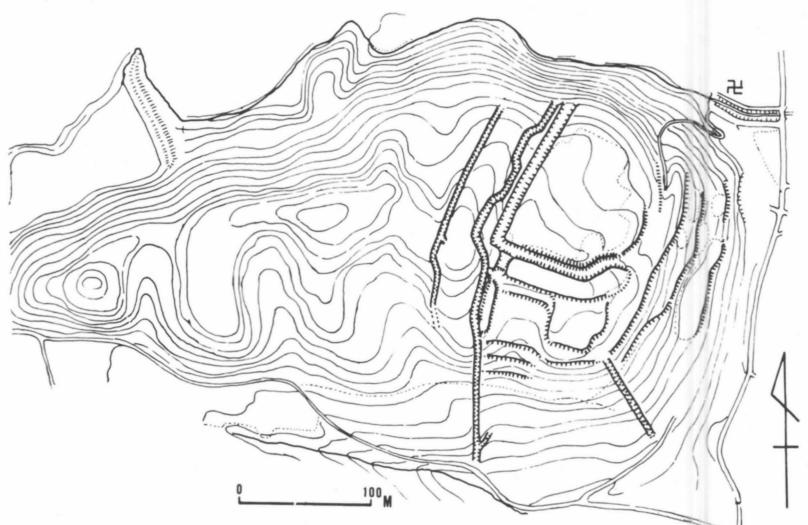
別称鶴野館。西根段丘の東端部にあり、洞泉寺裏手の比高約30mの独立状丘陵部がそれである。

全体面積は約40,000m²で、北東部で主郭を中心に東と南に腰郭、西に空堀をめぐらして要害としている。

主郭は一辺約100mの方形で、上幅6～8m深さ2～3mの空堀で囲まれ、その南東部分に折邪みが認められる。腰郭は北側には認められず、東と南に3段認められる。東は宅地と化し、かなり変形しているが、南は舟形状の郭を囲み、面積も広い。

特徴ある遺構は主郭掘の外側を走るジグザグの空堀である。この堀は上幅約5mのV字形の堀で、南斜面を真向ぐ下って平地へと続く。この堀の後背に約10mの間を置いて上幅約3mの空堀が並行しているが、工事途中のようでもある。その他に南東に竪堀が1本認められる。

館主は安永の「風土記御用書出」に相去安芸とある。和賀氏の境の城と推定される。





二子城 北上市二子町字宿

別名飛勢城。和賀氏の本城で和賀郡最大の城郭跡である。北側と東側は北上川とその沖積地に面する段丘崖で、西側は稻瀬火山岩層を基層とする丘陵部である。その全体規模は南北約1,000m、東西約500mである。ほぼ中央の通称飛勢の森は（現八幡神社境内）標高約130m、沖積地から約70mで最も高く、その周囲に平常居館や家臣家敷が配置され、東側沖積地には宿と呼ばれる城下集落が形成されている。

城主の平常居館は古館、または白鳥館と呼ばれ、城内の北西隅にあり、100m四方が堀割されている。そしてこの南に堀（現在自動車道路）を隔てて同規模の文珠院という一郭がある。この両郭の西側は飛勢の森まで平坦地であるが土地利用が変化して元の状況は明らかでない。但し、主郭西側は北上川に面する段丘で、八重櫻屋敷、加賀館、坊館、監物館、筒井屋敷と堀で区画された重臣の屋敷跡が連なっている。これらに対し文珠院の南側に和小路という侍屋敷跡が続き、さらに南西側に斎藤屋敷、渋谷屋敷、大森屋敷と区画の判然としない重臣屋敷が配されていた。

詰城たる飛勢の森は南北約100m、東西約70mで、その西側に空堀をめぐらし、その延長は南北に突抜け、城郭の東半分を区画したかの

浮牛城 北上市口内町字松坂

口内川左岸の標高139m、比高約20mの独立した丘陵である。最頂部の本丸跡は武彦神社境内で、面積約8,000m²、二の丸はこの東から南にかけて広がり、南は的場跡と伝えられている。この二の丸の南に広がる最も広い場所が三の丸で、重臣屋敷跡と伝えられ、今も宅地が並んでいる。しかし、二の丸と三の丸の東側一帯は開田され、そのおもかげがない。

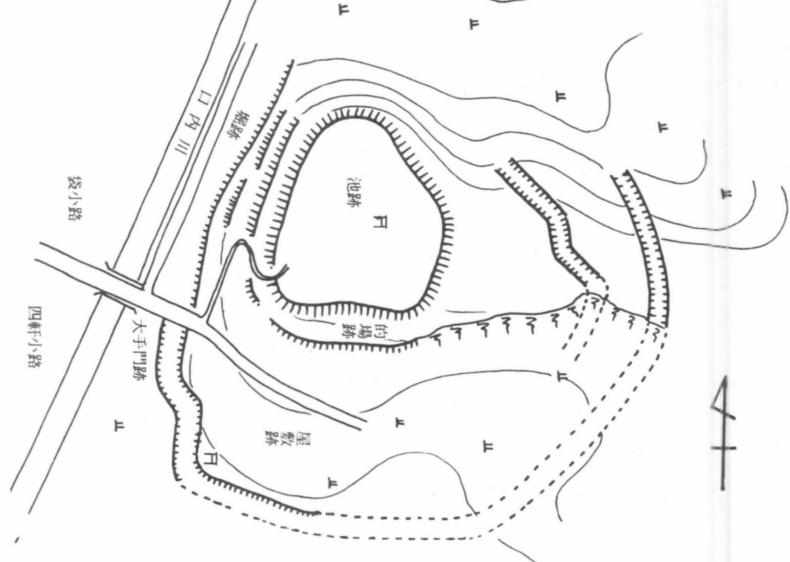
東側丘陵基部は2重堀で切られていたが、今はその痕跡を北側に残すのみである。その内側の堀は上幅約6m深さ約3mで、折邪みも認められる。外側の堀は城全体を囲繞していたとされ、その一部は南東に幅約10mの沼地として残っている。

本丸跡に石積みの樹形虎口があり、池跡もある。三の丸跡には西門、土門、鬼丸などの地名が残り、馬屋、大手門といった跡もある。さらに口内川を渡った右岸には向小路、四軒小路、袋小路などの家臣屋敷があった。浮牛城は口内帶刀の居館を藩境警備の要害として改築し、仙台藩士が居住した地である。

如くである。飛勢の森から西の鞍部（現道路）を隔てて元愛宕という独立丘陵あり、狭い頂部に2段の腰郭がめぐらされていた。現在浄水場と化したが、緊急発掘で住居様堅穴遺構が1棟発見されている。また、元愛宕から約500m北に物見ヶ崎（秋葉山神社）という独立丘陵があり、これらはいずれも物見台跡と推定される。

飛勢の森の東斜面には3～4段の帯状腰郭がめぐらされて、最下には御前水と呼ばれる井戸跡がある。その他の遺構としては北上川べりに遍照寺跡、元愛宕の南に永明寺跡あり、現在両寺とも宿部落に移っている。

二子城の築城年代は不明であるが、「邦内郷村史」によると、かつて和賀氏の本城は更木町にあったらしく、永明寺もそこから移転したと伝えられている。天正18年奥州任置によって廃城まで約150年間位と推定される。



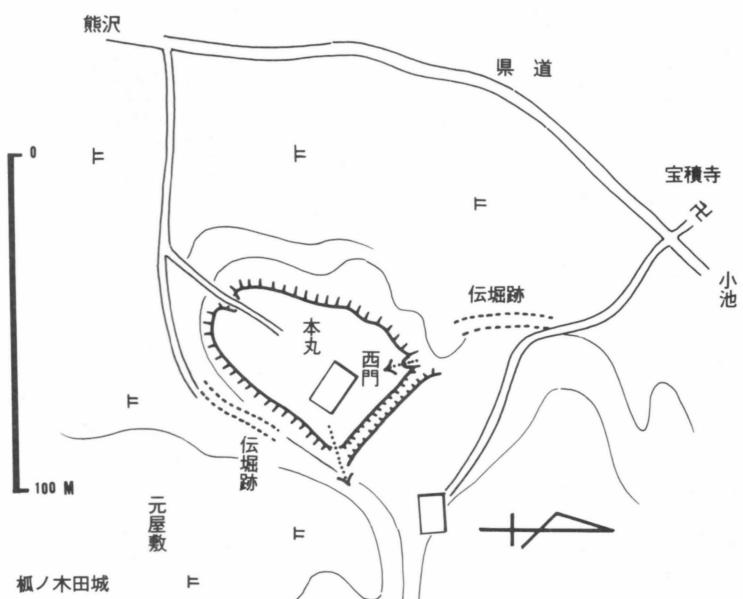
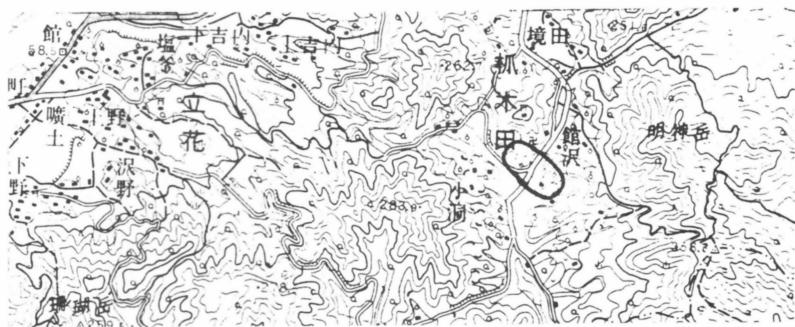
楢ノ木田古館 北上市口内町大字楢ノ木田

別名大和館。字館沢にあり、県道沿いの楢ノ木田城（及川林家）と呼ばれている他と、約300m東方丘陵部の楢ノ木田古館からなる。これらは居館と詰城の関係にあり、同一施設と考えられる。

楢ノ木田城は約2,000mと狭いが、幅約4mの堀を隔てた北側に二の丸と称する広い畠地がある。しかし、堀などで区画されていない。

「仙台領古城書上」に城主楢ノ木田大炊とある。

楢ノ木田古館は北東から南西にのびる尾根状舌状地で、2郭からなる。北側丘陵基部を幅約6m、深さ約2mの堀で切り、その堀の延長が東西斜面を帯郭状にのびている。主郭は東西約50m、南北約60mで、二の郭は東西約15m、南北約50mである。二の郭の周囲にはこれといった遺構は認められない。この館跡について安永年間の「風土記御用書出」に「大和館 但し、楢ノ木田大和と申す者住居仕候」とあり、楢ノ木田大炊との関係は不明である。



高館 北上市黒沢尻町大字立花

立花の塩釜部落の東から西にのびる丘陵頂部（低地から比高約40m）一帯が館跡である。館跡内は通称一の台から五の台まで段々に造成されている。一の台は東側最高所にあり、約3,000m²で二の台に斜め裏から通じている。各平場は地形に応じて広き形とも異なるが、四の台が最も広く造成されている。これら全体をぐるりと空堀で囲み、南側傾斜面には腰郭が2～3段造成されている。空堀は幅10mと広い部分もあれば、丘陵基部の幅5mと狭い部分もあり一定していない。この堀の土を後背に地均して、北側全体に10～40mの平場が造成されている。

五の台は堀を隔てた四の台の西側にあり、その西端は妙見神社境内である。

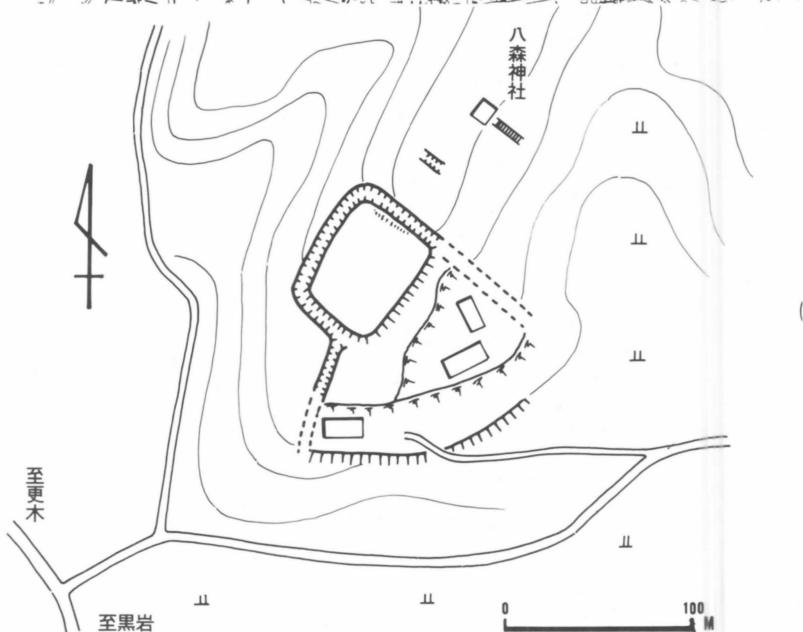
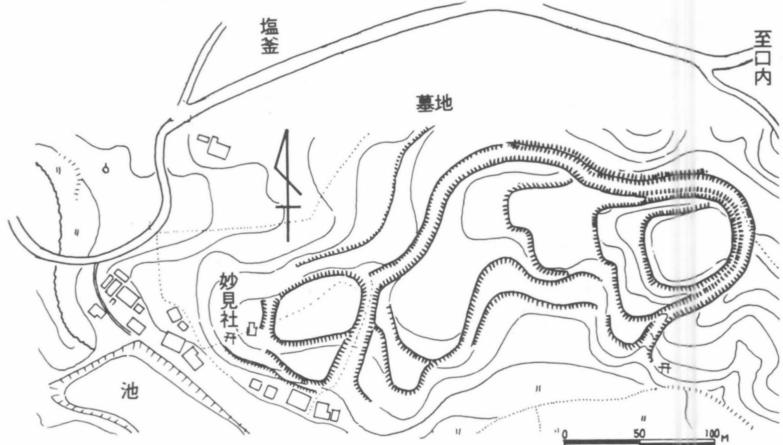
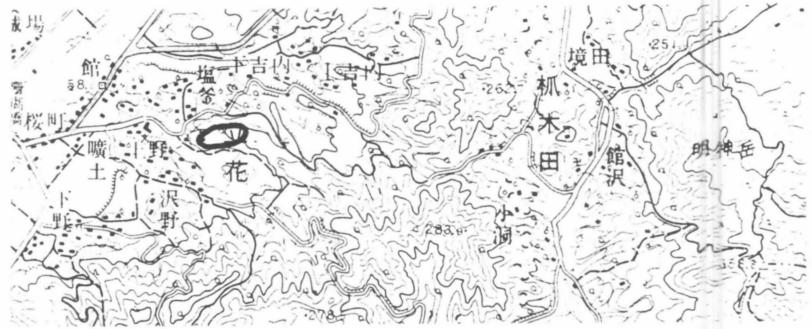
昭和59年の分布調査で一の台の一部が発掘されたが、全く遺構も遺物も発見されなかつた。また、外觀からであるが、各郭の連絡や堀の規模が一定しておらず、工事の完成を見ず放棄したことが考えられる。伝承では多田満仲家臣藤原仲光の城という。

天王館 北上市更木町大字八天

県道更木線から北東約300mの八森神社（午頭天王）のある丘陵先端部にあたる。高さは谷面から約50mで、主郭は南北約30m、東西約40mである。その南東辺を除く三辺に幅約5m、深さ約3mの堀がめぐっている。また、主郭と八森神社は約80m離れているが、その中間ほどに幅約1mの堀切がある。腰郭は主郭の南東に広がり、2段目までは明確であるが、宅地化した面積も広い。

遺構では堀の走向に特徴あり、主郭後背にめぐらした延長が一方は尾根筋を走り、一方は斜面下方へと真直ぐ伸びている。すなわち縦構え的な造りである。

この館跡周辺は八森とも八天王ともいわれ、その由来について「邦内郷村誌」に「按達天王、龍天王か。天王像午頭を戴き、天王像龍頭を戴く」とある。また、西南方県道沿いに南北朝の宝篋印塔と石塔姿あり、この館主との関連性が考えられる。館については「和賀御分限録」に「二百石梅沢近助」「梅ヶ沢氏天王館」とある。



陣ヶ丘 北上市黒沢尻町字立花

別名陣ヶ森。北上川と和賀川が合流する地点の北上川左岸独立丘陵がそれで、展勝地公園として整備されている。川面からの比高約20mで、西面は断崖絶壁である。

全体規模は東西約100m、南北約200mで、主郭は東西南北約50mである。中央部に井戸跡と伝えられる窪地あり、西側を除く三面に幅約4mの空堀がめぐらされ、北側は帯郭と化している。また、主郭南西側にも南北20m、東西10mほどの自然地形を空堀で囲んだ程度の一郭があり、さらにこの南側に突出した岩場がある。この岩場からの展望は良く、藩境協定図（江戸時代）には立石とある。この付近は江戸時代からの石切場であった。

陣ヶ丘は、前九年の役にて黒沢尻柵攻撃のため、源頼義が陣を構えたと伝えられている。この伝承の真偽は不明であるが、南側の沢が仙台領と南部領の藩境で、間の沢と呼ばれた点からすれば、中世にて和賀氏の葛西氏に対する境城だったと考えられる。主郭から元代の青磁破片が採集されている。

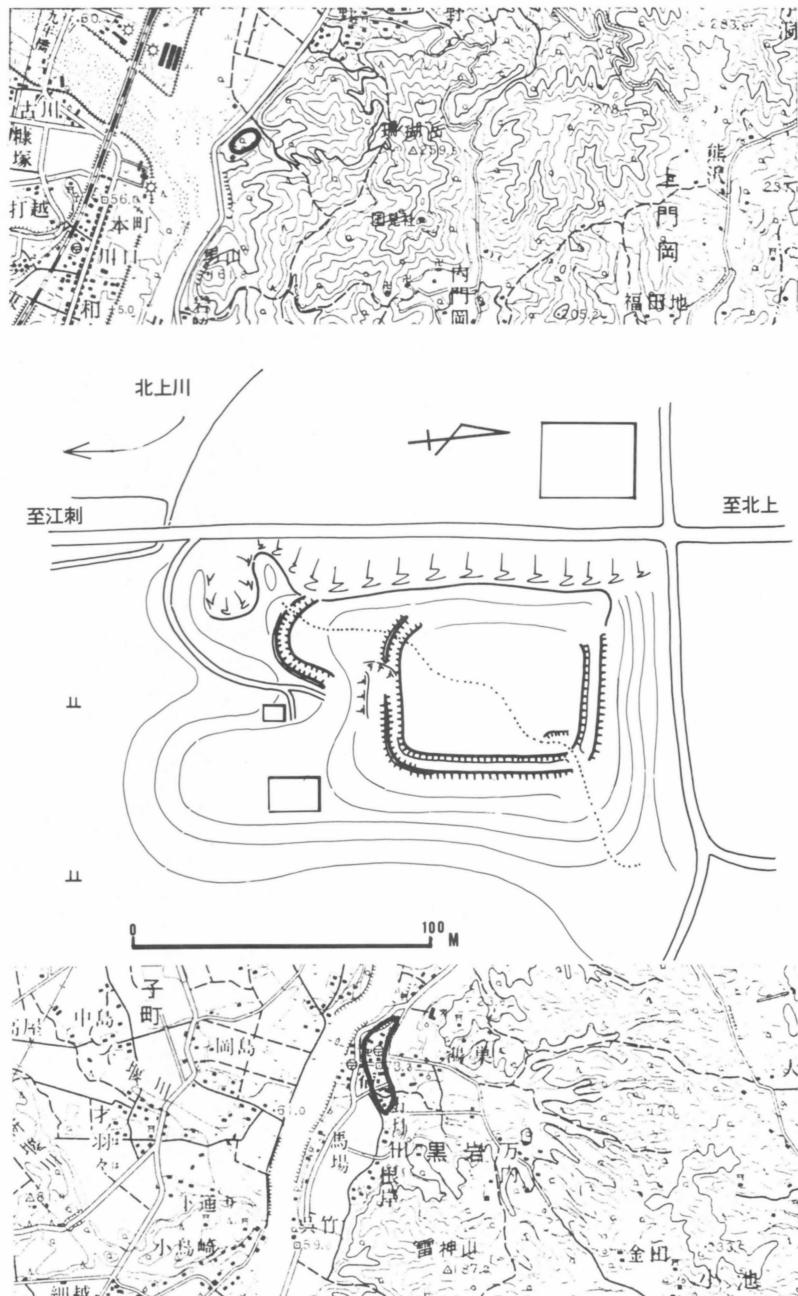
黑岩城 北上市黑岩下岩崎

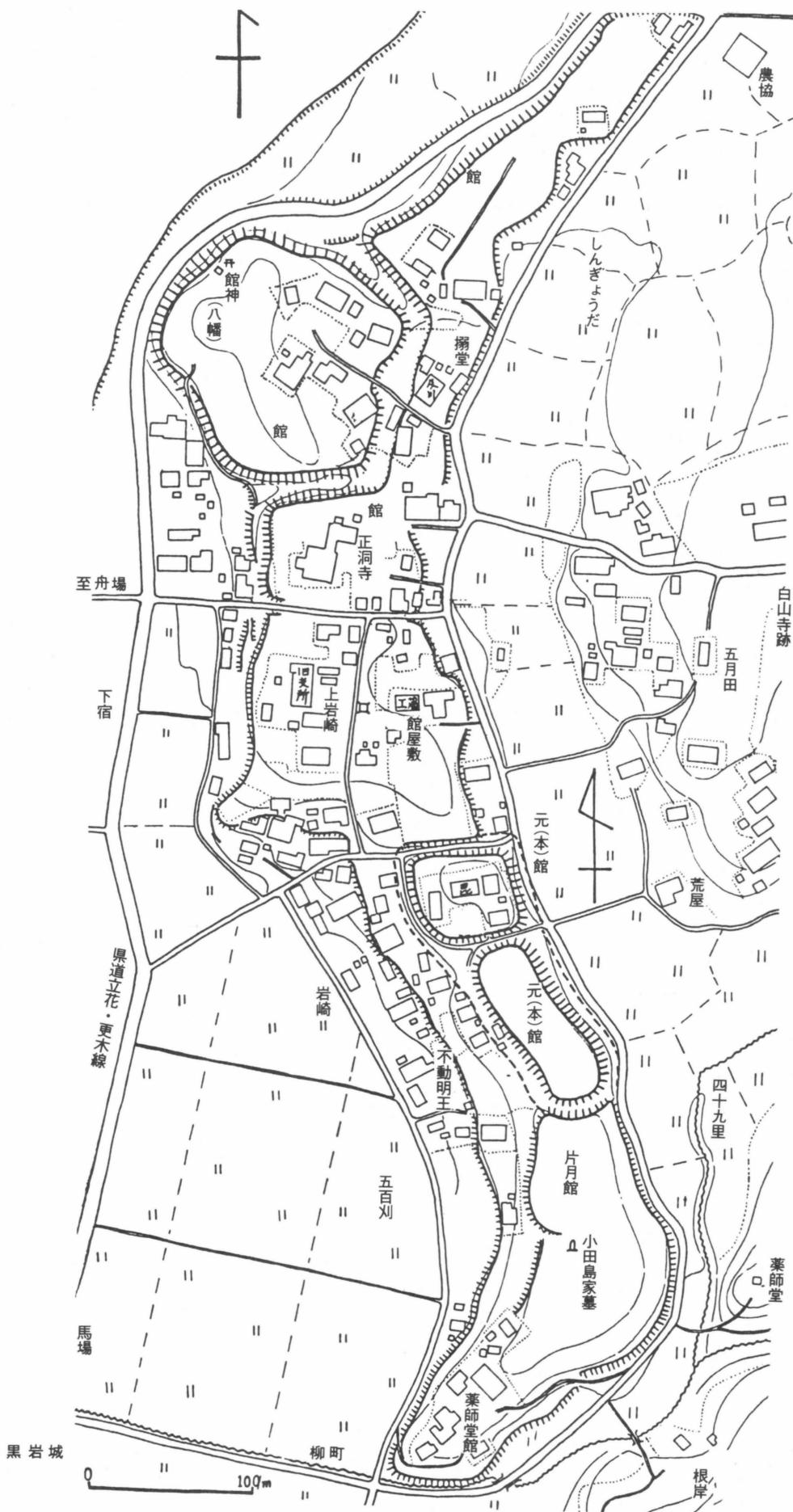
別名千曳城。岩崎塞。北上川左岸段丘上にあり、川面からの比高約20mを有する。全体規模は南北約500m、東西約200mを有する、が、これらは重複した館跡や家臣屋敷全体を含めた規模である。この西側に宿部落がある。

千曳城とは北上川べりに突出した 150 m × 130m の面積を幅約 20m の堀で囲んだ一郭である。ここは和賀一族の黒岩公月斉がこの地に移封され、永禄年間に築かれたと伝えている。この北東部を搦堂、南西部を城口と呼び北側一帯を館、南側一帯を、正洞寺境内を含め上岩崎と呼び、家臣屋敷が配されていた。

上岩崎と下岩崎は堀切道で分けられ、下岩崎には南北約100m、東西約50mで、南北二郭からなる元館がある。この元館は和賀氏が鎌倉時代に下向した岩崎塞とも考えられている。この館跡はかつての古刹白山寺に近い。

元館の南に片月館、薬師堂館と続く。片月館は月斎後見役の小田嶋主殿頭の屋敷跡とされ、今も小田嶋一族の墓がある。この西側沖積地に五百刈、柳町、馬場という地名がある。





小鳥崎館 北上市二子町小鳥崎

北上川右岸突出台地先端北側にあり、その崖下を大堰川が流れている。東西二郭からなり、西郭東西35m、南北50m、東郭東西40m南北50mである。規模及び構造からすると東郭が主郭で、その北側崖面にのみ帶郭が認められる。その長さ約50m、幅約5mで、主郭上面から約5mの段差を有する。

堀跡は台地後背部及び郭間に明瞭であり、幅約10m、深さ3~5mを有する。現存では断面V字である。また、西郭の西側堀から約6m隔てた所に幅約6m深さ約2.5mの工事途中と思われる堀跡が認められる。同様に堀の外側全周に土手状の高まりを有するが、前記の堀を延長させて2重堀にしようとしたかの如くである。さらに、西郭の西方約30mの地にも堀跡らしき部分が認められるが、館跡に伴うものかは不明である。

天正年間の記録と伝えられる「和賀御分限録」によると、小鳥崎館は都鳥平馬の持城である。北側平地が千刈と呼ばれ、さらに北方約3kmに本城二子城がある。

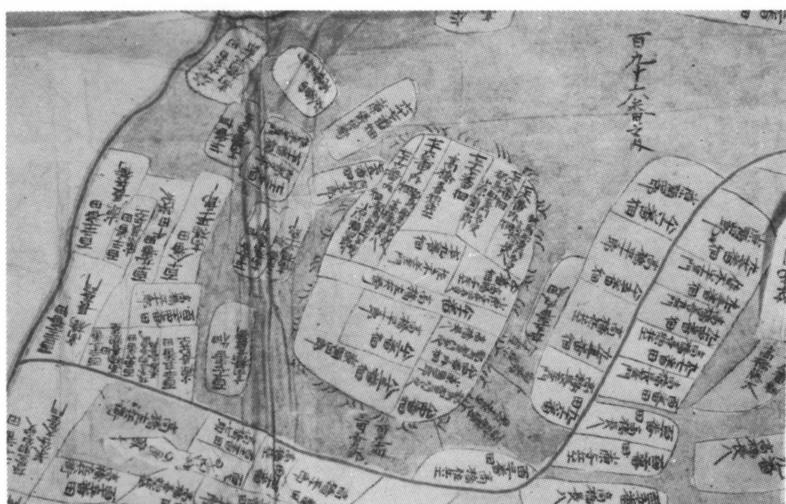
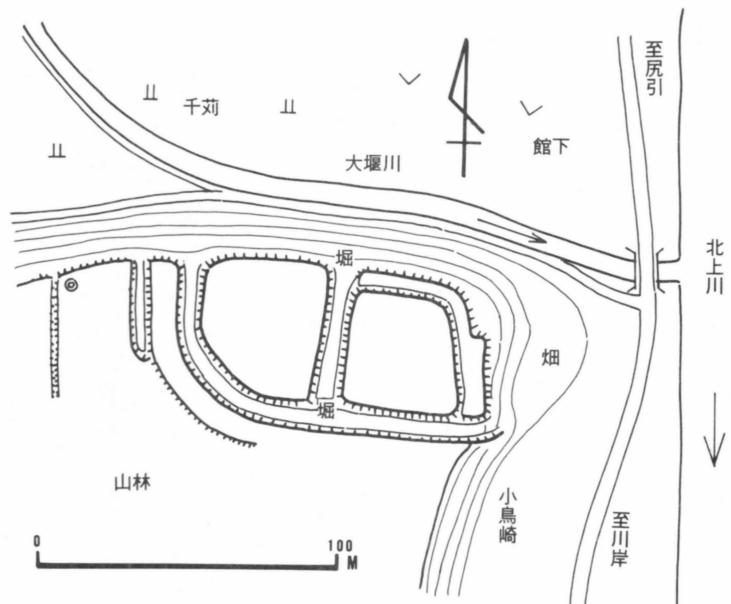
鹿島館 北上市鬼柳町字宿

上鬼柳の曹洞宗正覚寺の裏手、比高約20mの和賀川右岸段丘にある。この地は夏油川扇状地扇端部にあたり、北面は断崖で、成沢川や湧水による谷頭が入りこんだ地形である。

全体の規模は南北約200m、東西約450mほどで、内部は大小7郭に分割されている。成沢川の東に中世墳墓群を囲んだ一郭がありその対岸が主郭である。

主郭は約6,600m²で、元は東西に2分されていたものを後に一郭としたものである。埋めもどされた空堀は幅約5m、深さ約3mで中層から明代の白磁破片が出土している。また、主郭の北側と東側に幅約5mの帶郭がめぐらされ、東側の延長は主郭と二の郭の間の空堀に接続している。この空堀は上幅約6m、深さは約3mで、主郭側に高さ約1.2mの土壘がとりついている。また、この空堀には折邪みと土橋が存在したが、一帯は砂利取りによって破壊された。

二の郭も多くは破壊されたが、面積は約6,400m²で、その後背には自然の沢を利用した大規



模な空堀がめぐらされ、その延長は東側をめぐって主郭東側の帯郭に連続していた。この郭と主郭は一部発掘調査され、主郭からは2間×5間の中心的建物跡、二の郭から重複した掘立柱建物跡や住居様堅穴遺構が1棟発見された。

主郭の西側に谷頭を隔てて三の郭がある。面積約6,100m²で、ここも砂利採取によって緊急発掘され、10棟前後の掘立柱建物跡の他カマド状の遺構が発見された。遺物は、主郭、二の郭と同じ16世紀代の陶磁器破片や明鏡であった。

鹿島館は鬼柳氏が丸子館から移った後の本城と推定されている。天正20年（1592）の「諸城破却御書」（『岩手県史』）に「南部の内和賀郡鬼柳平城破却、南部主馬持分、代官鬼柳源四郎」とあり、寛永18年（1641）の「藩境協定絵図」には「上古城」とある。また最後の館主は慶長5年（1600）の岩崎一揆に参加した伊賀守盛正と推定されているが、廃城は天正18年（1580）の奥州仕置にて和賀氏本城と同時と推定されている。

丸子館 北上市鬼柳町字笊渕

別名笊渕館。国道107号線バイパスが突抜けた夏油川扇状地の端部にある。和賀川右岸沖積から高さ約11mの残丘状突出台地を中心にして3郭からなり、その規模は東西約300m、南北約250mである。

主郭は中央に突出した卵形の台地西側で約6,000m²である。西側の二の郭は約2,000m²で幅約10mの空堀で隔てられている。また両郭の前面約6m下に幅約5mの帯郭がめぐらされ、後背には上幅13.5m、深さ3.7m（外法側）の空堀がめぐらされている。このうち主郭のほとんどはバイパスと砂利採取によって破壊されている。

主郭の緊急発掘によって、2間×5間を中心とする20棟以上の掘立柱建物跡と住居様の堅穴遺構が発見された。遺物では14世紀～15世紀代の青磁・白磁の他、陶器類、古銭、青銅製品、鉄製品等が検出された。特に馬鍔の歯の発見は当時の豪族層の経済的背景を知る上に重要である。（「丸子館遺跡発掘調査報告書」『北上市立博物館研究報告書』第4号）。



三の郭は谷頭（現水田）を隔てた主郭の南側にあり、方形で約10,000m²を有する。これをめぐる空堀は、幅が主郭南のものと同程度であるが、箱堀状で浅く、内側には約1mの土塁が設けられている。また、三の郭の内部は、南から北へと傾斜し、内部は数段の平場に造成されている。この一帯は残丘に構えられた郭より、極めて要害性は低く、城外から望見される位置にある。従って三の郭は外郭として拡張された部分であるが、長期間使用されたとは考えられない。

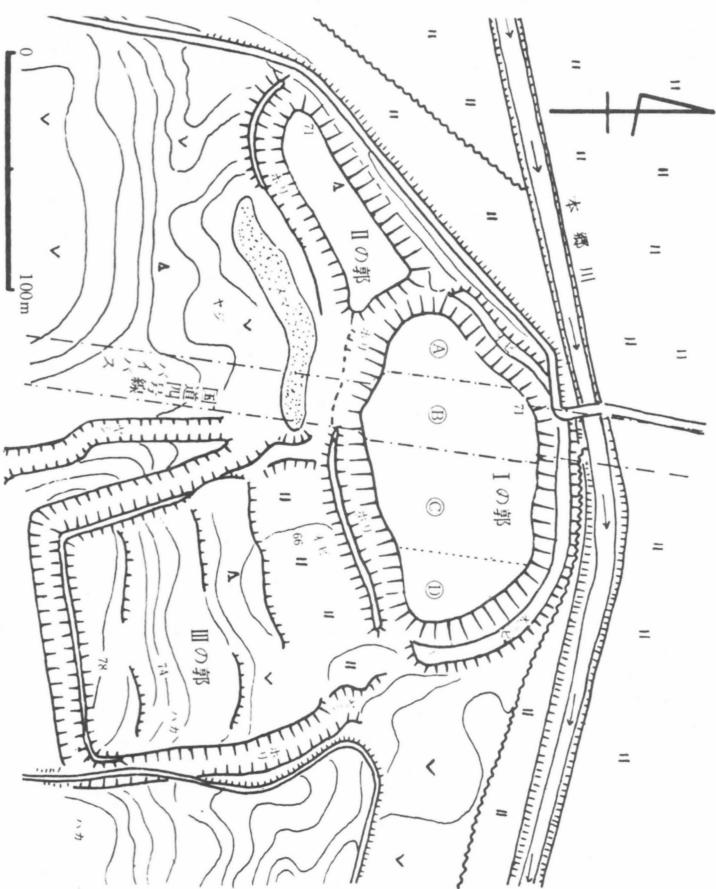
丸子館は、『岩手県管轄地誌』によると、天文年中（1532～1554）の鬼柳伊賀守の居城で、伊賀守は天正6年（1578）に上鬼柳の羽場館に移ったとある。また、「鬼柳文書」では、鬼柳伊賀守は応安3年から応永7年までの行動が記録されているが、居城については不明である。しかし、当時伊賀守の活躍は鬼柳一族第一であり、創建期も大体合致するので、丸子館は彼の居館にふさわしい。また『岩手管轄地誌』の移転年代は、出土遺物の下限からしてさらに遡ると考えられる。

下須々孫館 和賀郡和賀町煤孫

別名煤孫城・古館・觀音館。館跡は和賀川にそそぐ芦谷地沢左岸の高台で古館神社境内一帯である。標高120m、平地から約35mの高さで、南北約250m、東西約170mの範囲である。主郭は約15,000m²と広く、後背郭の約2倍を有する。後背郭とは幅約10mの直状堀で仕切られ、また丘陵基部は鉤形の堀で仕切られている。さらに南側の舌状部に約1,000m²の一郭あり、その丘陵基部も空堀で仕切られている。土塁は鉤形の堀とこの舌状部の堀の内側に認められる。また、主郭の前面には帯郭がめぐらされている。

全体的に古い要素と新しい要素が認められる館跡であり、徐々に改造されていった結果と考えられる。

南北朝時代の下須々孫は和賀越前守行義の所領であったが、行義が武家方に敗れ、惣領和賀基義の手に帰している。その後の沿革は不明であるが、慶長6年の岩崎一揆に参陣した者に煤孫城主煤孫野州とその子と思われる惣助がいる（『奥南盛風記』）。



岩崎城 和賀郡和賀町岩崎宿

別名岩崎橋。夏油川に沿ってのびる比高約20mの左岸舌状台地が城跡である。またその裏側の城内という部落一帯を含む。

台地は突端部を切り捨てた3郭で構成され、その中央が本丸である。面積は約5,000m²で現在は天守を模した岩崎公民館の敷地である。この南側三の丸は、約15,000m²と広大である。この郭外には組小路といわれる武家屋敷跡があったが、今は存在しない。また、本丸の北側は二の丸で、今は約2,000m²であるが、かなり夏油川に削り取られたらしい。

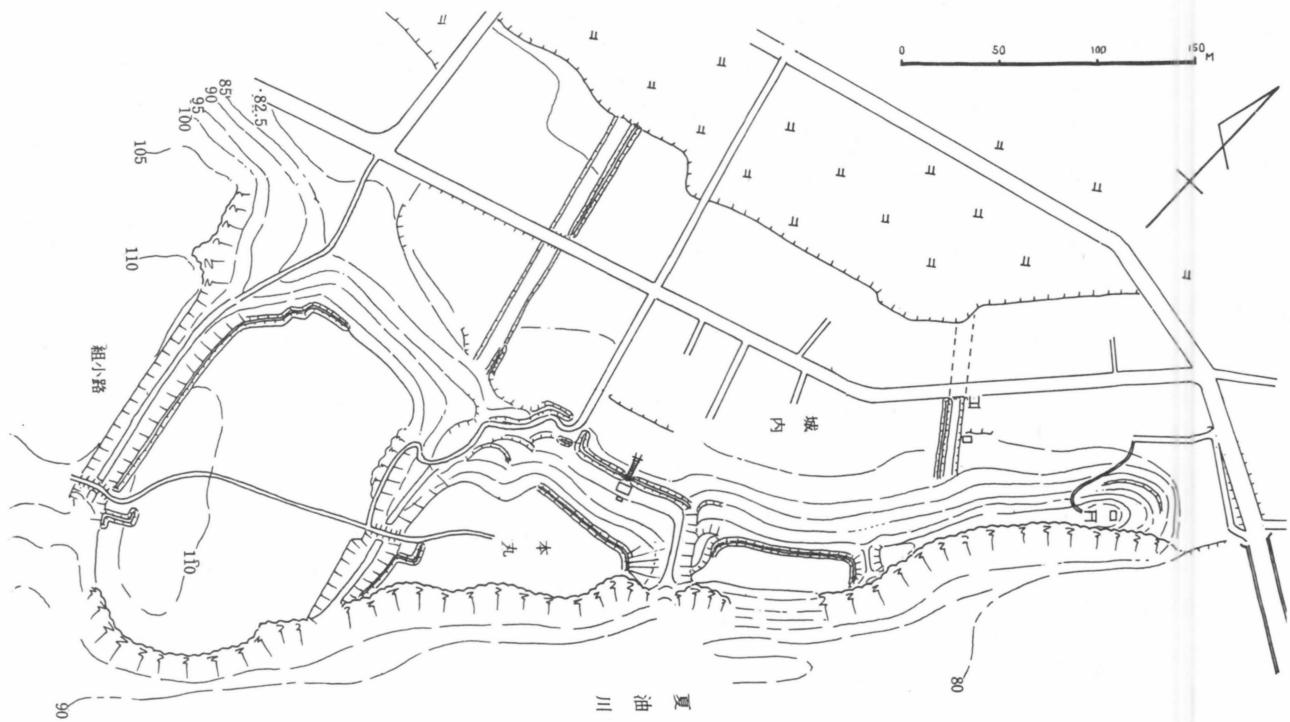
各郭の周縁には高さ約2mの土塁が築かれていたが、三の丸以外ほとんど消失した。また各郭を仕切る空堀は幅約20m、深さ約15mに達する所もある。特に本丸北側は堀の延長が腰郭となり、外縁に土塁が築かれている。この一角に和賀氏の氏神白鳥神社がある。

城内は和賀川低湿地を前面にした低台地で約25,000m²と広大である。内部は台地に沿って3郭から構成されていたらしく、方格状の堀跡と土塁が認められる。また、旧道が中央を貫き、それに沿って古い屋敷跡も認められる。

大手口は城内にあり、本丸の下と上、そして三の丸と組小路の間には櫛形虎口があった。本丸に公民館を建てるため緊急調査され、石敷の庭のある建物跡が発見されたが虎口は調査されなかった。遺物では美濃小皿や明代の染付破片が出土した。

岩崎城は南北朝時代に岩崎大炊なるものの居住が考えられている。また、この付近は須々孫氏と鬼柳氏の領界にあつたらしく、暦応4年（1341）に「岩崎橋」で合戦あり、鬼柳方に討死者を出している。その後、享禄4年（1531）に和賀氏と秋田仙北の小田嶋党との戦いに岩崎氏も出陣しているので、代々岩崎氏の居館だったと推定される。

天正18年（1590）の奥州仕置後破却されたが、慶長5年（1600）に和賀忠親が旧家臣とともにこの城にたて籠った。その時、発頭人の一人が岩崎弥右衛門義彦であった。一揆鎮圧後、南部家臣によって修理され、藩境警備のため柏山伊勢守明助が入城した。



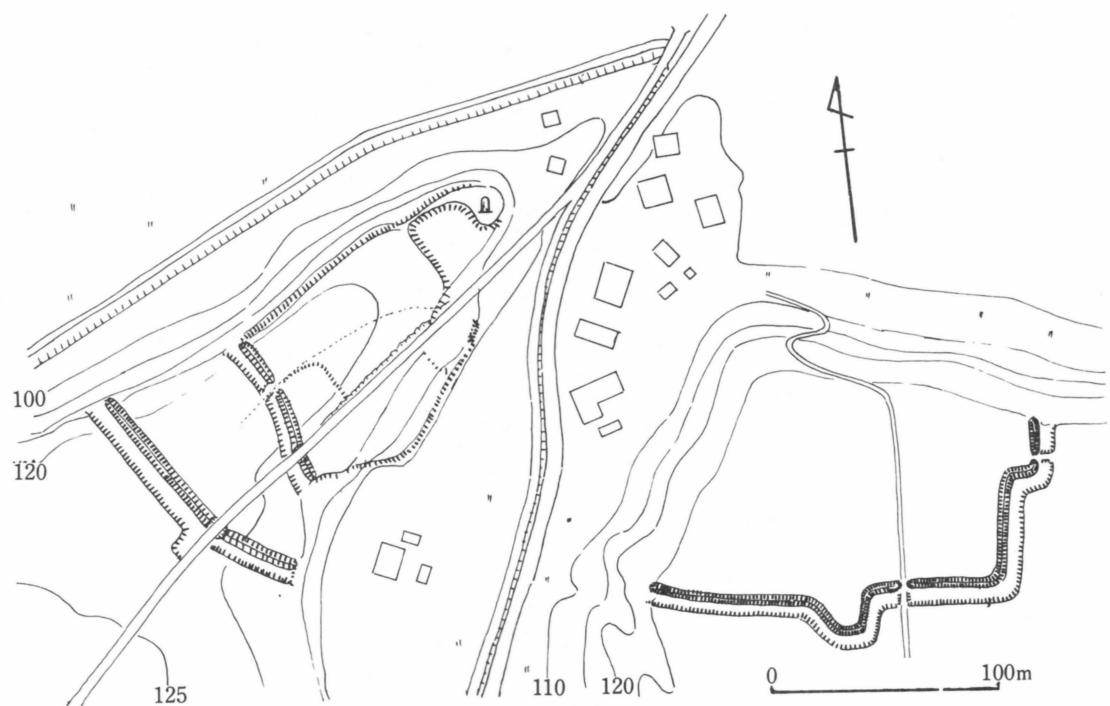
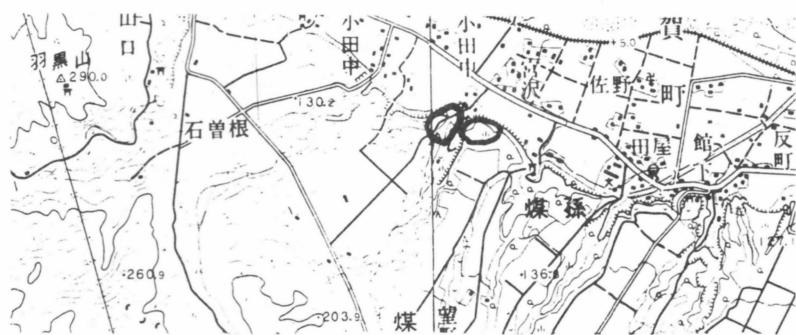
上須々孫館 和賀郡和賀町煤孫本郷

館跡は和賀川にそそぐ熊沢川の両岸台地である。その東側を林崎館ともいうが、便宜上東館と西館とする。両館とも沖積地からの比高約20mである。

西館は全体で約200m×約100mで前後二つの郭からなる。この台地先端部には元享3年(1323)の石塔婆があり、主郭から切り離された部分と考えられる。主郭は約8,000m²と広く、後背郭とは歪んだ堀で隔てられている。丘陵基部を切る後背郭の堀はやや弧状である。土塁は主郭、後背郭ともにあるが、主郭が大きい。

東館は東西約150m、南北約120mで単郭である。東側と南側に巨大な空堀をめぐらし特に南辺は逆乙字形となっている。また、北東隅も鉤形に曲げられ、土橋が設けられている。堀もあり埋没しておらず、西館との構築年代差は明らかである。

この地は煤孫本郷であり、鎌倉時代の和賀景行の所領「須々孫野馬」の中心地と推定できる。また東館は天正の頃の館と推定される。



田中館 和賀郡和賀町山口

瀬畠部落の南方にあり、南東から北西にのびる鈴鴨川右岸段立突出部が館跡である。標高約130m、沖積地からの比高約25mである。

全体は230m×100m程度で3郭からなる。中央の主郭は方形を呈し、約7,000m²を有する。その北西隅に館八幡がまつられている。後背の郭とは幅約10mの直状堀で仕切られ、内側（主郭）には高さ約1.5mの土塁が築かれていたらしくその一部が西側に残っている。後背の郭は横長で主郭よりやや狭く、丘陵続きは鉤形の堀で切り、やはり内側に土塁が残っている。

主郭の前面には幅約10mの空堀があり、その下方約15mに平地から約5m高い平場がある。面積は約5,000m²で、館の一郭と考えられる。

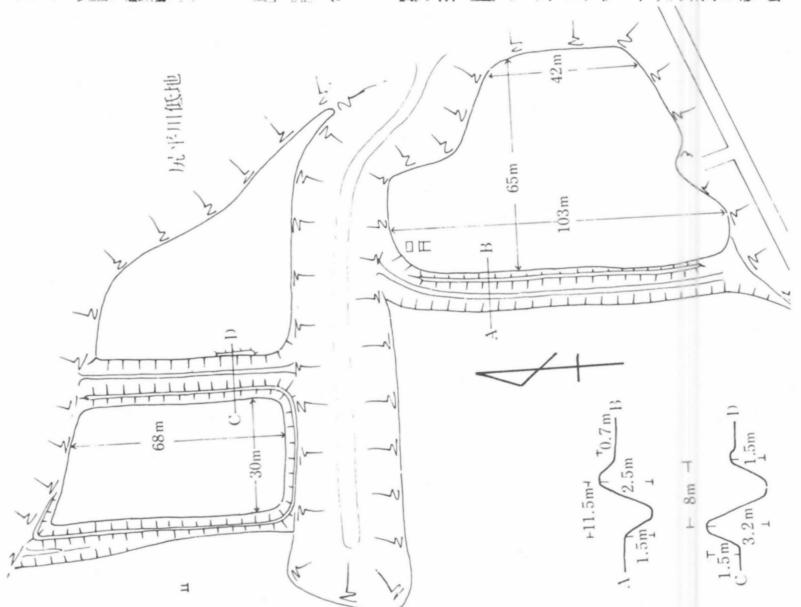
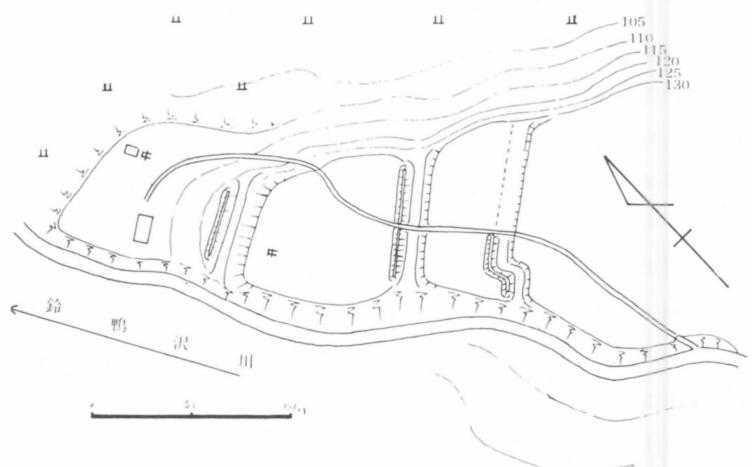
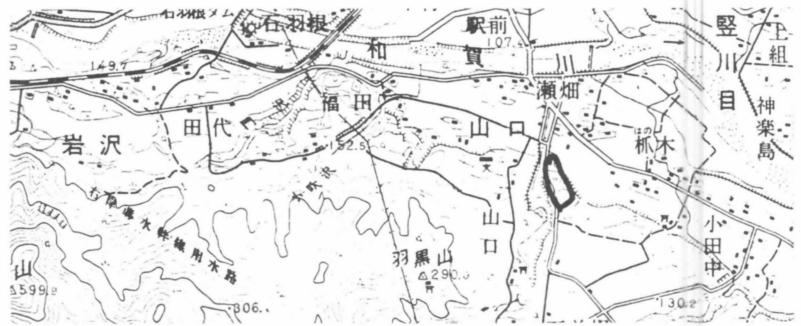
館主、沿革とも不明である。館跡の北側にある瀬畠部落は東西南北の重要道路の交差点であり、田中瀬という中世の和賀川の渡し場にも近い。従ってこうした交通の要所に構えられた館跡とみられる。

時田館 和賀郡和賀町芦谷地

館跡は和賀川支流尻平川右岸の比高約10mの段立崖縁にある。主郭とすべき大型の一郭と、谷頭によって舌状に張り出した二郭と計3郭からなる。尻平川流域では最大の複郭形式の館跡である。

主郭は東南にあり、その面積約5,000m²であり、その西側は南北約100mの空堀と土塁で仕切られている。沢を隔てた北側は東西2郭からなり、東郭は三角形で西郭は長方形である。いずれも約2,000m²を有し、幅約6mの空堀で仕切られている。西郭の後背も空堀で仕切られていたが、今は開田によって埋められている。また、西郭は北辺を除く3辺に土塁が築かれており、他の郭との年代差や性格の差が考えられる。

尻平川流域は鎌倉時代に室対郷と称したがこの一帯は新平や笛間などとともに和賀景行の領地であった。それ以降どのように変遷したか不明であるが、時田某には時田某という地侍が居住したという（『和賀郡誌』）。



下仙人館 和賀郡和賀町岩沢 9地割

現在石羽根ダムとなった和賀川右岸で、滝ノ川によって形成された舌状台地先端部が館跡である。標高155m、湖面からの比高は約20mである。館跡は単郭で東西56m、南北46mを有する。丘陵基部は2本の空堀で切られている。内側は長さ約30m、幅約7m、深さ約2mあり、南側に土橋が設けられている。外側は10~17m離れており、幅約3m、深さ約0.5mと小規模である。土塁はこの内側にわずかに認められる。また、この堀の北側は意図的に曲げられ、土塁にも礫の混入が認められる。

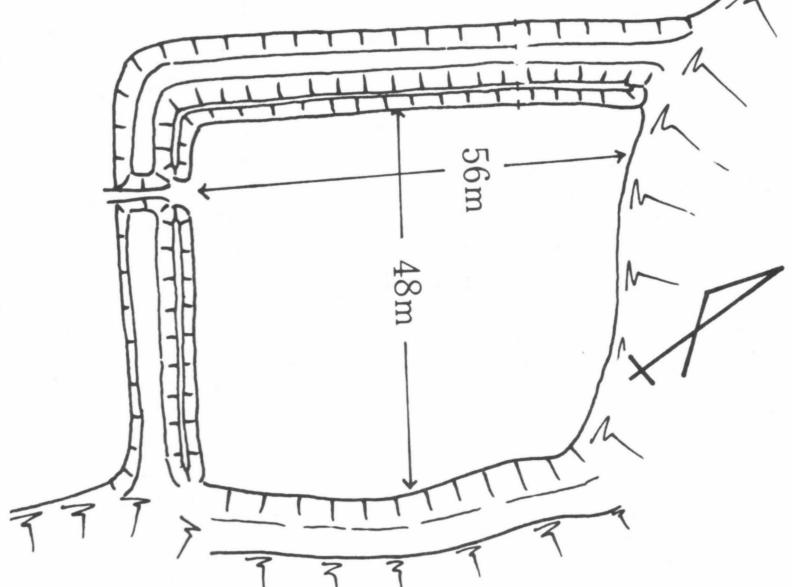
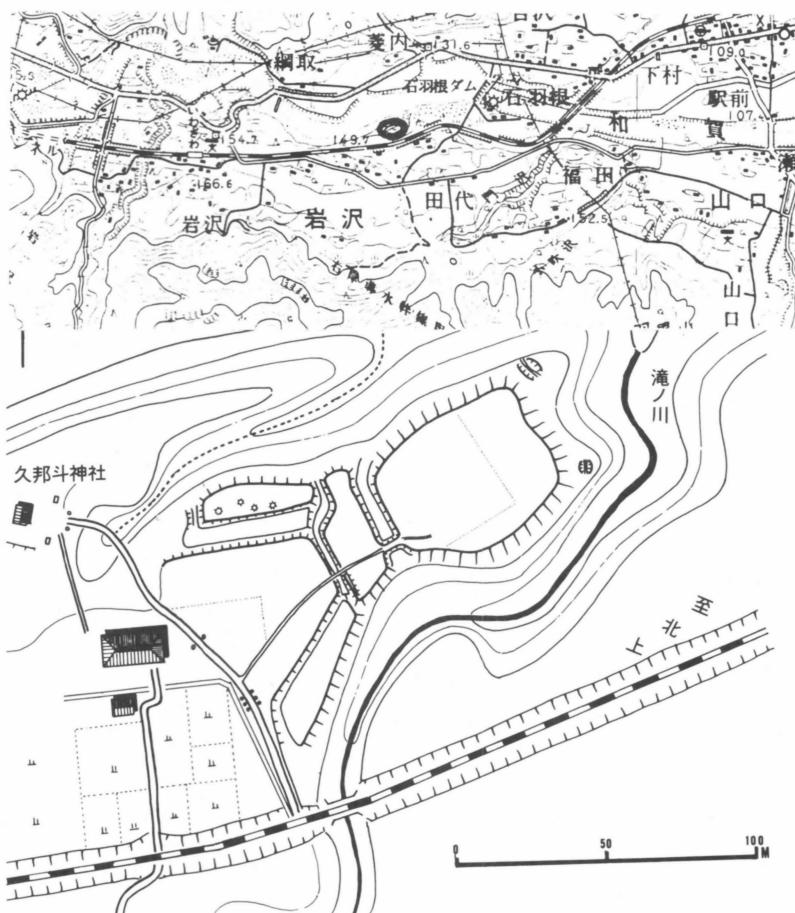
以上の遺構の外側にも削平した平坦地や、塚状の遺構が認められるが、館跡と関連するかは不明である。郭内からは16世紀代と推定される染付破片が表採されている。

下仙人には和賀家の仙人別当淨念坊と、妙楽院というものがおり、慶長5年（1600）の岩崎一揆では和賀忠親に加勢している。館跡はこの修驗山状の居住地と推定されている。また、100m西側の久那斗神社は天文3年（1534）勧請の岐神仙人大権現の下宮である。

七折館 和賀郡和賀町岩崎七折

比高約10mの夏油川左岸段立ベリにあり、56m×48mほどの平地を空堀と土塁で方形に囲み、東側に帯状の郭部を設けた構造である。空堀は幅約7m、深さ約2mで、外側に高さ約0.5mの土塁が設けられている。腰郭は約5m下方にあり、幅約4mほどで夏油川沿いのみである。

この館跡は『和賀記』に慶長5年（1600）10月に「岩崎城之西兵庫館と申所に三日被成御座、七折と申所之出崎を御普請被仰付御陣場に被成」とあり、翌年3月に「城之南西七折御陣場出来候に付十三日之晚御移遊候由」とある。また『公国史』に「公（南部信直）煤孫村寺坂より西（東の誤りが……筆者）兵庫館に陣し、又七折を修覆して陣城とす。時に伊達政宗か将白石若狭（中略）六原野に出て小平に陣す」とある。従って、七折館は信直の陣として構築されたものか、古い館跡を修築したものかは明らかでない。



中館 和賀郡湯田町大字湯田

湯本から沢内に向かう湯本バイパスが右に大きくカーブするところに中館跡がある。比高約70m、標高約300mの丘陵先端部である。主郭は頂部平坦部であり、地形に即してその周囲に段差の低い平場を2~3段めぐらしている。全体の形は鉤形で、その全面積は約2,000m²である。頂部には井戸跡と思われる凹地もある。



空堀は後背部を画すようにめぐらされ、その末端部は堅堀と化して斜面を下っている。また、丘陵基部は二重堀で切られ、その後背に狭い平場を置いて1本、さらに馬背状の尾根を置いて1本と切られている。西側には意図的に曲げた空堀の走りも認められる。空堀の幅は約6m、深さ約3mに達する部分もある。全体的な構造は沢内村の毘沙門館とよく似ている。

館主は中館左衛門尉と伝わるが、沿革は不明である。この地方は南北朝時代に和賀行義の領地であり、このうち「中村田在家半分」が和賀義光に与えられている。

五条丸館 和賀郡江釣子村下江釣子16地割

五条丸古墳群の西方200mの金ヶ崎段丘縁辺にある。南は和賀川沖積地、東は五条丸古墳群の立地する自然堤防を望む。標高72~74mで、和賀川沖積地との比高約4.5m、自然堤防との比高約2mを測る。

郭は東西2郭からなり、西郭は東西約70m、南北約55mを測り、西、北辺に幅7~8m、高さ約2mの土塁をもち、西土塁の外には幅約9mの堀跡が認められる。東郭は東西約50m、南北約65mを測り、東西郭の間に幅約6mの堀跡が認められる。江釣子秀保氏所蔵絵図によると、西堀西方に更に一条の堀らしきものがあるが、現在は不明。西郭の民家の屋号が館屋敷、東郭の民家の屋号を前館といふ。

館跡の段丘崖下は湧水地帯であり、古墳群が分布する如く、古代からの良田地帯であったと考えられている。従って館主不明であるが、多郭形式である点からも古い館跡と推定される。



江釣子館 和賀郡江釣子村下江釣子村16地割

上江釣子十文字の南東の金ヶ崎段丘縁辺に立地し、南は和賀川沖積地を望む。比高約5m、標高約74mである。現状は東西約95m、南北約50mの単郭で、東・西・北辺には幅約10~25m、深さ約3mの堀がめぐらされている。これらのうち東西の堀は自然の沢地形を利用したものと思われ、土塁は北側に認められる。

郭内には江釣子神社・八幡神社宮司・自性院別当をつとめ、村内で唯一軒江釣子氏を名のる民家がある。また、永正の頃(1504~1520)創建と伝えられる貴徳院(天台宗)がある。江釣子は和賀氏屈指の重臣で高橋氏とともに称し、慶長5年(1600)の岩崎一揆には発頭人の一人であった。

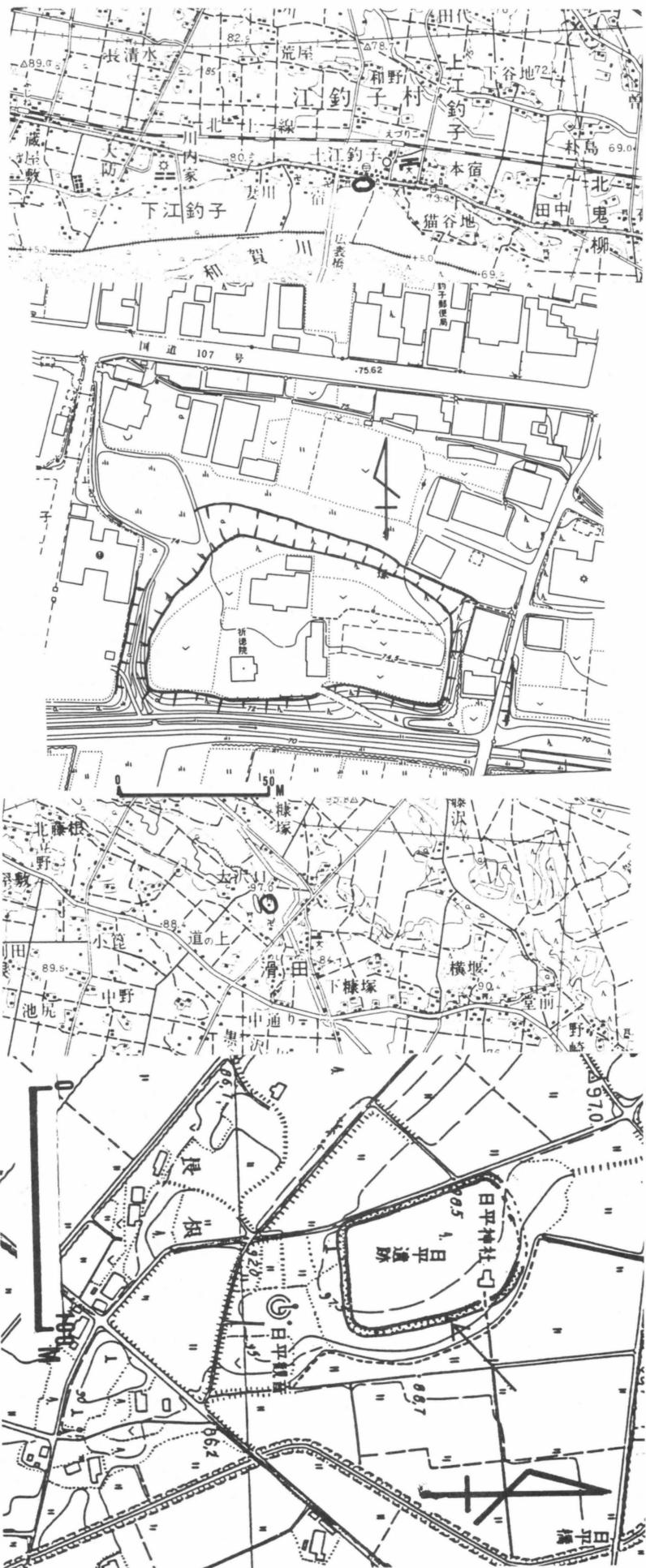
郭外の西堀北には嘉禄元年（1225）創建と伝えられる江釣子八幡があり、その北に正和元年（1312）銘の石碑がある。さらにこの周辺は「宿」という地名が残り、北1kmの地に江釣子城と称する遺構消失の館跡がある。

新平館 和賀郡江釣子村新平 2 地割

館跡は江釣子村の道の上と糠塚との間を南東に延びる村崎野段丘舌状台地先端の北側にある。現在日平神社の境内も含まれている。

沖積地からの比高約10m、標高は95m前後である。遺構は東西約80m、南北約120mの略方形の空堀とその内側に高さ約1mの土塁がめぐらされている。その他に外観から知れる遺構はない。

この館跡は昭和31年に発掘調査され（板橋源『岩手県江釣子村新平遺跡発掘概報』昭和35年）、空堀は薬研堀で、中から土師器が発見された。また、内城から大規模な建物跡が発見されて、古代の廃と推定され、岩手県の重要な史跡に指定された。古代駅に空堀がめぐるという例はないが、「牧ぶくろ」と似ているとされている。この地は鎌倉時代に和賀氏の祖義行の三男景行が牧として相続した地域で、現在でも館跡周辺の台地を「マツコのセバ」と呼んでいる。遺跡の南東には岩崎上道（岩崎城と花巻を結ぶ）があり、「山賊街道」という間道もある。



毘沙門館 和賀郡沢内村田代

新町の西方田代の毘沙門神社裏山が館跡である。西から東に延びた丘陵が先端部で南北に広がり、遺構はその頂部全体に認められる。全体の規模は南北約120m、東西約70mであるが、南東側を欠く方形プランを呈する。頂部の平場は約2,000m²を有し、北側と西側には段差の低い帯状の平場が設けられる。この外周全体を幅約6m、深さ約3mの空堀で囲んでいる。この空堀の延長は南西で丘陵基部を切り、北東で折邪みを造って堅堀と化している。また、空堀の外側に土塁状の高まりも認められ、それが数ヶ所跡切れた部分もある。さらに空堀は南斜面にも認められ、丘陵基部の外側へと延長し、さらに拡張をしようとした痕跡のようである。

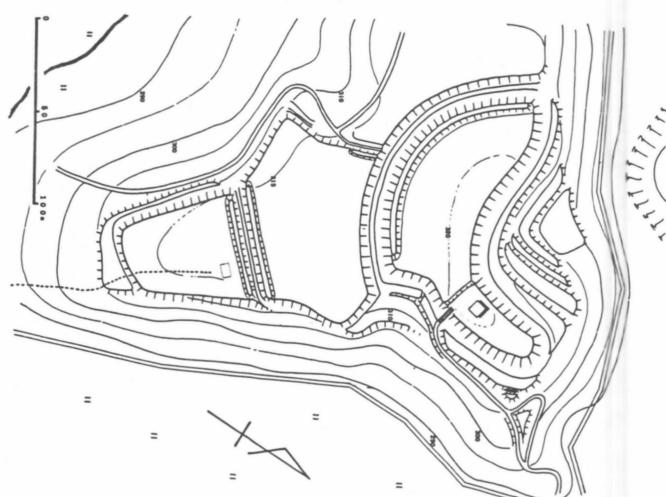
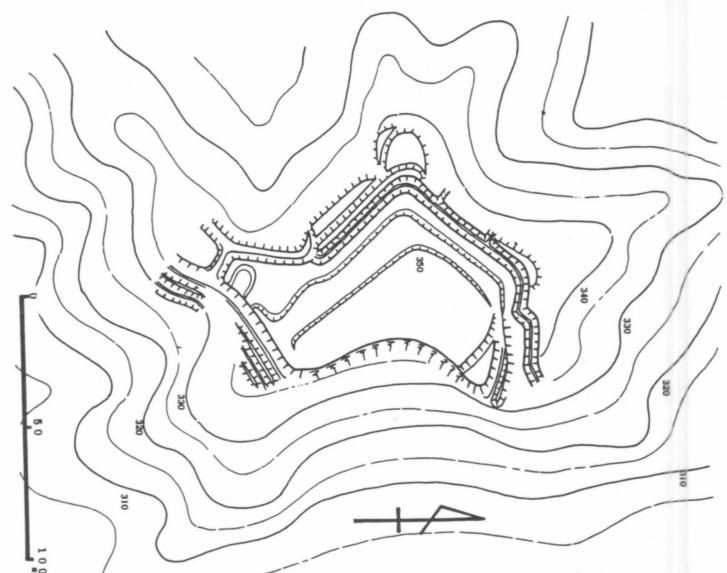
館主は『和賀郡誌』によると、青山下野守田代冠者義季とあり、毘沙門神社には同氏の守り本尊が安置されたという。田代部落は館跡の東南にあたり、田代沢の水を利用した古い水田地帯が広がっている。田代冠者とはこの地の土豪と考えられる。

典膳館 沢内村新町第1地割

別名天神館。前郷部落の西方約300mの本内川右岸高位段丘先端の残丘状台地にその跡がある。標高320m、低位段丘からの比高約30mである。館跡の規模は南北約280m、東西の最長部は約180mで、約25,000m²と和賀川上流域最大である。

構造は南北三郭からなり、主郭は本内川べりの北端にあり、東西約120m、南北約50mの平坦な三日月形である。この主郭と二の郭は幅約12m、深さ約7m(内法側)の空堀で隔てられ、主郭側には高さ約2mの土塁が築かれている。この空堀の走向は弧を描き、東端では北に鉤形に曲げられている。また、本内川べり斜面には段差の顕著な腰郭と帶郭が数段めぐらされ、極めて大規模な工事が施されている。しかし、これらに対して外郭の堀や土塁は貧弱であり、修築もあまり加えられていないようである。

典膳館は伊達政宗家臣片倉小十郎先祖の出身地(『沢内風土記』)と伝えられている。
かつて二の郭に天神社がまつられていた。



八幡館 和賀郡沢内村太田第3地割

太田部落八幡宮と中の寺（淨円寺）西裏手の出崎状丘陵部が館跡である。別名八幡山と呼ばれ、標高347m、下からの高さ約50mで西から東に延びている。

館跡の規模は東西約220m、南北最長で約120mを有し、実質面積は約15,000m²である。主要部は主郭と副郭の東西郭からなり、これらに段差の大きい平坦な腰郭を数段とりつけ、その全体を帶郭で囲繞した構造である。

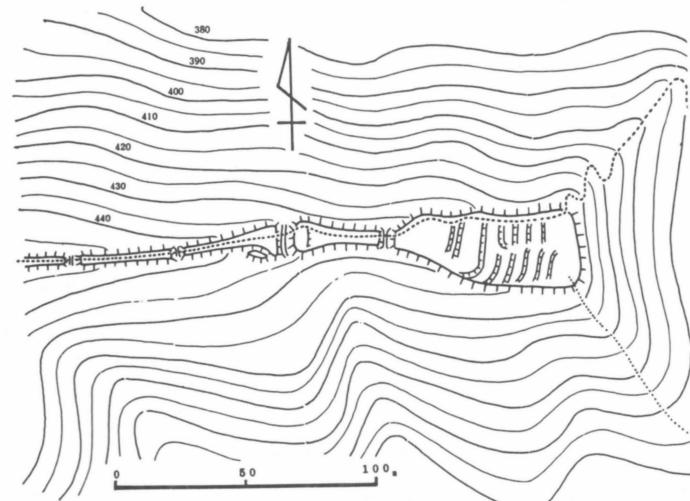
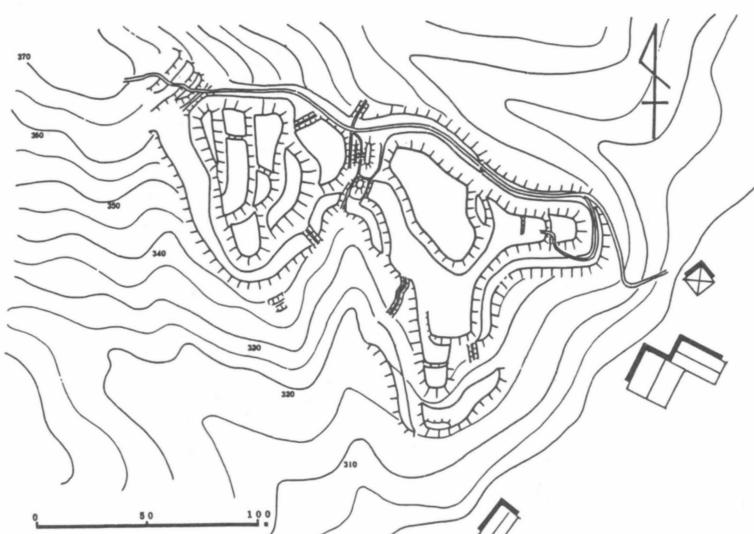
主郭は東郭で、最頂部平場は約1,500m²、次段の腰郭はその約2倍の面積を有する。これらに対して西郭は東郭を守備する位置にあるが、さらに後背丘陵から俯瞰される条件の悪い場所である。そのためか東郭とは3重堀で隔てられ、内部には家臣の宅地割と思われる6段の平場が認められる。丘陵基部にも1本の空堀とその外側に2段の狭い造成地が認められる。また、これら館跡全体を囲繞する帶郭は5ヶ所ほどの堅堀で仕切られている。

八幡館は館主・沿革とともに不明であるが、この地の領主太田氏の館跡にふさわしい。

深沢館 和賀郡沢内村太田

太田の北部山中に深沢という谷あり、館跡はその奥部約1kmの地にある。そこは西から東に延びた尾根東端部で、周囲は急峻で、谷底からの高さ約100mの地である。そのため頂部の平場は東西約70m、南北約25mである。しかも、東西端の比高差約16mあり、実質面積はさらに狭い。それが12区画ほどの小さな平場に造成されており、その様は掘立小屋を1棟づつ配置したかの如くである。館跡後背の西側は通路幅ほどの細い尾根筋で高山へと続くが、この間約130mの間に4ヶ所の堀切がある。その大規模なものは幅約7m、深さ約3mといったものである。周囲斜面にも帶郭や腰郭といった部分はなく、まさに緊急に仕立てられた逃城といった館跡である。

深沢館は『岩手県管轄地誌』に太田氏の祖太田十郎なるものが築造したとある。しかし、『奥羽永慶軍記』によると、和賀家臣筒井縫殿助が太田の奥山に城郭を構えたとあり、その可能性が高い。



御所ノ目館 和賀郡沢内村七内

館跡は七内部落に面する比高約140mの丘陵部にある。西と南斜面は急峻であるが、北および東は他の丘陵地に連続している。

全体の規模は北東から南西に約100m、幅は最大60mで、実質面積は約5,000m²である。その構造は頂部から自然傾斜面なりに帯状の腰郭が数段、南東側にめぐらされている。その数は物見台状の最頂部(約80m²)とその北側の平場(約1,500m²)を除くと4段である。いずれも段差が大きく平坦である。堀跡はこれといった所がなく、丘陵基部もどの程度埋れているか不明であり、それが和賀川沖積地側斜面に幅約2mの帶郭のように延長しているに過ぎない。

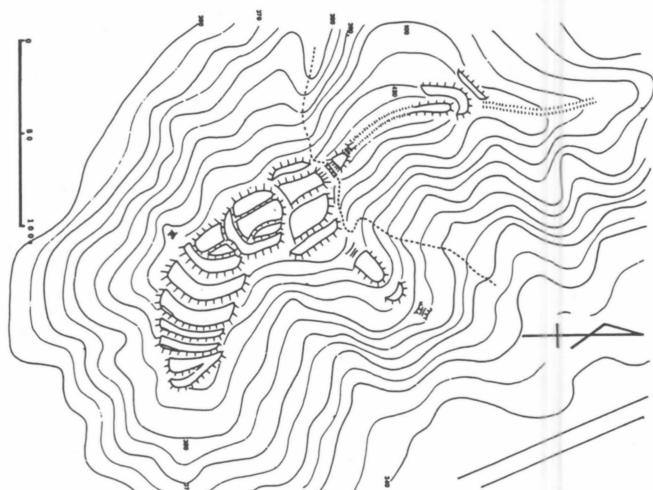
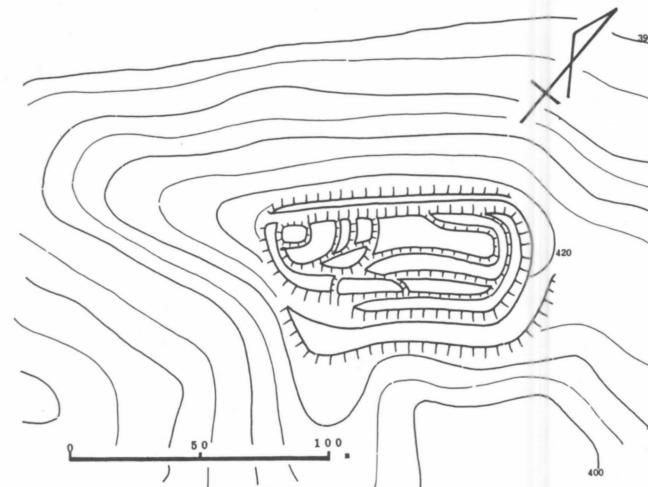
御所ノ目館とは零石の御所(斯波氏)が見えるからと伝える如く眺望のよい地である。館主は太田民部の長子伊左工門の三男猿橋五郎と伝えられているが、詳細は不明である。現在の猿橋の中心は和賀川右岸であるが、御所ノ目館の館下集落は館跡に最も近い七内であったと推定される。

川舟館 和賀郡沢内村川舟

館跡は和賀川と支流横川が合流する地から北東約1.5kmの丘陵頂部である。この地は北東から南西に延びた急峻な山地で、標高419m、平地から約80mの高さである。

館跡の規模は尾根筋に長さ約230m、最大幅約100mを有するが、実質面積は約6,000m²で、最頂部の平場は50m×20mと狭い。そして、南緩斜面を何段にも削平して腰郭が設けられている。しかし、これら平場はいずれも傾斜し、完全ではない。堀も北にのびる道幅程度の尾根筋を2本で切断しただけである。また、その尾根北端頂部を物見台状に加工している。ここからは主郭からでは見渡せない川舟の北部一帯が広く俯瞰できる。

川舟館跡は戦闘に関する伝承を残しているが、館主沿革とも全く不明であり、館跡すら多くの人に知られていなかった。しかし、立地条件からすれば、川舟の下村、中村、小坂を館下集落とし、南方の丸志田まで勢力のあった館主の存在が考えられる。



(五) 胆江地区概観

胆江地区とは、水沢市・江刺市・前沢町・金ヶ崎町・胆沢町・衣川村を含む。旧郡域からみると、胆沢郡・江刺郡の大半と磐井郡の一部を含む。

この地方は胆沢扇状地（北上川西岸）と北上山地の西縁部の丘陵地（同東岸）に二大別される。つまり、西に肥沃な胆沢平野を、東に山なみの迫る山塊をもつ自然景観を示すことになる。

当地方の開発を城館から見ると、それは平安時代初めの胆沢城造営をもって初見とすることができる。可能性としては奈良時代の「タテ」の存在も考えられ、また、そのような伝承を残す館跡もあるが、現状ではそれを検証できないし、その事実もない。

胆沢城は「方八丁」とも呼ばれるが、「方八丁」地名を残す遺跡が当地方でもいくつか散見する。これらは胆沢城の外には何ら確たる遺構の存在は証明されていないが、今後も注意すべき遺存地名のひとつである。平安時代後期になると、在庁官人や在地領主層の抬頭により、安倍氏・清原氏・藤原氏が在地支配の表に現われてくる。奥六郡（胆沢・江刺・和賀・稗貫・志和・岩手）の長安倍氏と国府軍との戦いを記した「陸奥託記」には衣川柵・鳥海柵が戦闘過程で現われている。これが「前九年の役」である。この戦いの約20年後、今度は清原氏と国府軍との「後三年の役」が起った。「後三年記」には胆沢郡白鳥村・江刺郡豊田城などが見える。この延長上に藤原清衡を初めとする藤原氏の支配が出現する。これから推測するに、すでに平安時代後期には大領主を頂点とする一族、譜代による小領主の各地域支配が居館（城）を中心に実施されていたと考えることができる。ただし、11~12世紀はあくまで古代的支配であった。いずれにせよ、古代末期の当地方は、主要な政治動向の舞台となっていたのである。

文治5年（1189）源頼朝は藤原泰衡を平泉に攻め、藤原氏は滅んだ、これにより、陸奥は直轄支配地となり、総奉行として葛西清重が入部してきた。中世的世界の始まりである。葛西氏は平泉に居館したが、氏の家臣団が当地方に地頭などとして派遣されてきた。柏山・江刺氏はこの中にあって葛西氏の有力家人である。柏山氏は大林城に、江刺氏に岩谷堂にあって、それぞれ在地領主化していき、支配を行った。また、柏山氏の譜代老臣である三田・大内・蜂谷氏も小領主として前沢城・水沢城などに配置された。一方では土豪などの旧来勢力も存在しており、両者の確執やあるいは庇護を求めてその傘下に入るというような動きがあったと推定できる。一般に鎌倉御家人勢力は河西方面の

平山城や平城を中心に周辺を分割支配していたようであり、旧来勢力は河東方面の平山城あるいは山城に退いた体勢が当初の姿かと考えられる。

南北朝、室町時代の14世紀前半から16世紀後半になると鎌倉御家人の在地領主化が明確になり、また恩賞としての土地領知化が甚しくなって、小領主の分割支配が細分化されてくる。一方では、土豪化したことにより、支配権などをめぐる内紛、他領主との合戦を通じて、在地支配機構が再編されてきた。その典型が水沢地方における柏山氏の領国化であり、一大権勢を築いた。その反面では葛西氏の衰微は日を追って増していく。これが室町後期の戦国時代の特徴であり、当方も日本史的運動の中で連動していたことは明白である。

天正18年（1590）小田原の北条氏が滅亡し、秀吉はこれに参連しない奥州の葛西・柏山氏をはじめ諸勢力の「奥州仕置」を開始した。近世江戸時代はもうすぐである。葛西氏らは領主権を没収され追放されることになった。

しかし、秀吉の奥州政策に反対する葛西旧勢力は、水沢城の松田氏や岩谷堂城の木村氏を攻めるなど、しばらくは反乱状態であった。この状態を平定したのが伊達政宗である。政宗は藩境防備の観点から当地方にはその重臣を多く配し、またいわゆる要害屋敷等も存在させ、その支配に留意した。当地方には留守氏・大町氏・岩城氏・小深川氏等々の諸氏が配され、以後明治維新までその支配を続けることになる。

城館の分布は、河東が山城ないし、残丘の上に立地する形態が多い。河西は胆沢扇状地が水沢・胆沢・一首坂の三段丘に区分され、平山城が胆沢段丘の縁辺に、平城が水沢段丘の平坦面に築城される。また、金ヶ崎町の西奥駒ヶ岳山麓の山裾には山城がある。さらに西方から長く張り出す残丘状の段丘に立地するものは、規模の大小を問わず平山城に分類した。館は単郭、輪郭式は少なく、連郭式のものが多い。ただし、平城になると単郭式の館形態をとる例が多くなる。占地形態からみると、北上川流域に集中する山城と、胆沢段丘沿いに集中する平山城、そして平地に占地する平城に大別でき、前者が、水陸交通と軍事的要衝の地にあるのに対し、平城は農耕地の中心に占地するという館の性格を示唆するものがある。

再述になるが、この地方は仙台領と盛岡領の境界に位置しそれが近世初期の城館分布に大きく影響していたといえよう。

胆沢城（方八丁）水沢市佐倉河字渋田外。

城跡は北上川と胆沢川の合流地右岸の水沢段丘上にある。標高48～50m前後、一帯は80%が水田地帯。国指定史跡の古代城柵跡。

胆沢城は延暦21年（802年）に坂上田村麻呂が造営し、まもなく多賀城から「鎮守府」もここに移された。

城の規模は一辺約670mの方形で、外周は築垣で区画される。これが外郭線である。外郭線の外側に幅5m前後の大溝が、内側に幅3mの区画溝がめぐる。外郭南面中央には楼門（重層構造）の南門が配され、ここより南方へ幅12mの南大路が伸びている。外郭北面中央にも門が配されるが、規模は南門より小さい。外郭東西門は不明だが、この他に外郭からは東面北櫓、南櫓、西面北櫓、中櫓がみつかっている。いずれも1×1間から1×2間に建て替えられる。

外郭内中央やや南寄りの一角に方90mの大垣（一本柱列）で区画された地域がある。これが胆沢城の政庁域。内部正面には正殿が配され、その前面は広場となっている。城の瓦葺建物はこの正殿と外郭南門で確認されている。政庁を区画する内郭線では東面門と北面する門の2ヵ所が発見され、他の西・南門あ

るいは正殿前面左右に配される東西脇殿は未確認である。

外郭内には政庁域周辺を中心にして、いくつかの官衙が配されている。これまで北方官衙、北方東官衙、東方官衙、東方南官衙などが発見されている。北方東官衙は九蔵川右岸上にあって、この付近を「舟窪」という。この官衙の正庁は北廂を有し、舟窪に面して建てられており、官衙が九蔵川舟運利用による文物を管掌していたことが明らかとなった。他に井戸、総柱倉庫、付属棟が検出され、官衙の構成要素も判明した。

官衙跡からは大量の土器とともに、漆紙文書、木簡などが発見されている。漆紙文書には、古代の村落の状況を語る兵士歴名簿、具注曆、鎮兵関係のものなどがある。

胆沢城造営後、胆沢・江刺・磐井の3郡ができるが、上述の資料とも合わせて、城の仕事は律令体制に組込む村の整備にあった。



水沢城（要害） 水沢市字表小路

城は水沢段丘の微高地上にあり、いまは市街化し、遺構のほとんどは破壊されている。城はまた、北に水沢段丘中央部に形成された谷底平野を望み、段丘崖北縁部に立地することになる。南約1kmには中位段丘の胆沢段丘が迫る。城の地勢は、北西方から流入する乙女川（御留川）で城の北を限り、西は自然地形の低地に面する。城の北、直下を流れる乙女川は城への物資交通路として利用された。

城の規模は測定できず、一般に200m方形位といわれるが、『要害絵図』や『臥牛城実測図』を参考に、現地図上に復原してみると、東西320m、南北400mの矩形を呈する平面形となる。城内は本丸、二の丸、南屋敷、三の屋敷の4区画に分かれ、初期の城の規模は本丸、二の丸だけで、漸次南、三の屋敷へ拡張していったといわれる。城の周りには外側に濠を、内側に土塁が築かれているが、城内各郭も独立して濠と土塁がめぐる。門には大手小路に面した大手門、南の郭の裏門、二の丸の埋門（うずみもん）の他に詰門、本丸御門、中門などがある。本丸の規模は東西130m、南北110mで、二の丸は東西140m、南北150mと後者が広い。地籍図には本丸の北と西、南屋敷の西と南に堀割跡が水田として残つ

ている。

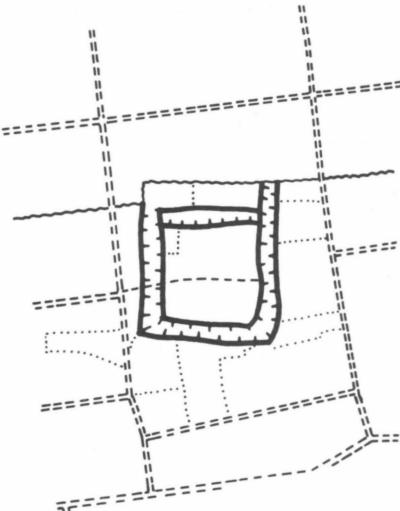
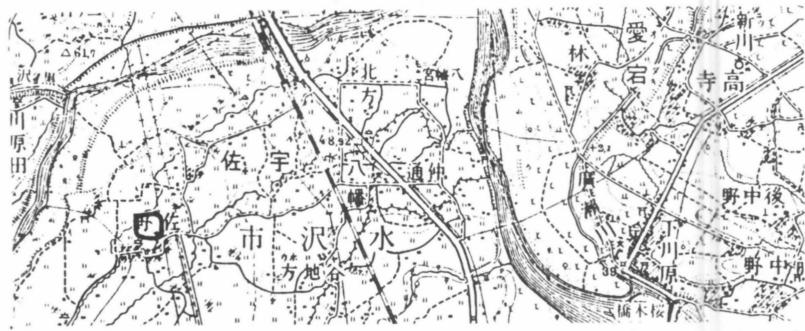
城主は中世は蜂谷、佐々木、大内の各氏が、末期の天正18年には溝口外記の家臣松田太郎が入城した。その後伊達政宗の所領となり、城主に天正19年白石宗実が封ぜられ、近世水沢の初代城主となった。以後柴田兵部・惣四郎の2代、石母田大膳と続き、寛永6年伊達（留守）宗利が金ヶ崎城より移居して、水沢の礎を築いた。宗利は翌年から町づくりを開始し、町区の地割りに喰い違い道路を入れ、20余町に分画して居宅を定めた。現在の水沢の原形である。

小路は重臣、中下級家臣の居住区、^町丁は足軽、最下級家臣の居住区とし、さらに柳町以下の六町をその外周に配した。大手小路北側の一画から直径14cmの三巴文の鎧瓦と均整唐草文の宇瓦が出土している。ここは重臣村岡氏邸宅跡であった。

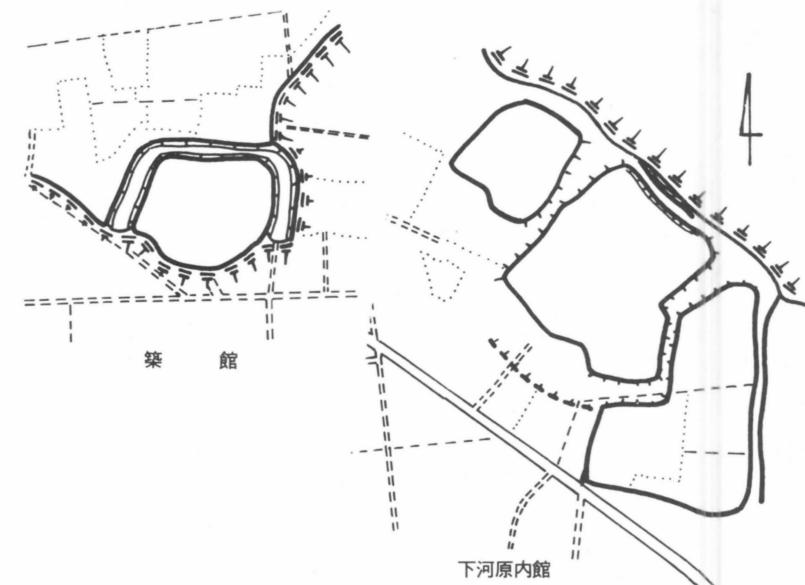


佐野館（タテツバタケ） 水沢市佐倉河字宿

胆沢川右岸、水沢段丘の標高57m付近の平地にある。東西、南北約90m方形の規模で内郭は微高地の畠。周囲に10~12mの濠がめぐり、今も一段低い水田の窪地となっている。単郭式平城。城主は不明だが、『風土記』には大野将監先祖が居住とある。館の南に隣接する小集落を「宿」という。



下河原内館（轟館） 水沢市佐倉河字東館
北上川右岸、水沢段丘の標高50m前後の段崖にある。一帯を東館という。いま公舎が建って付近の景観は破壊されている。一応全体の規模は東西200m、南北180m位と解されるが、遺構は西・東郭からなり、それを濠で画したものだが、いまは埋められ、その痕跡を認め得ない。西郭が主郭で「内館」といい、東郭を「東館」という。内館は東西90~100m、南北140mの規模で、北崖部に土塁の一部が確認できる。西に接して安養寺がある。中世に下河原氏が、後、羽黒堂氏居城。



築館（塩釜古館） 水沢市字築館

那須川を南に見下す、段丘崖南端部に館がある。高台は標高60m前後の平坦地、谷底面との比高差2~3mある。館は単郭で南面は崖面利用、東・西・北に水濠をめぐらす。規模は東西120m、南北85m、濠の幅約10~15mある。郭内周縁部に土塁痕跡を僅かに認める。北方の地名を西館という。中世後期は葛西家臣峰谷氏の居館という。

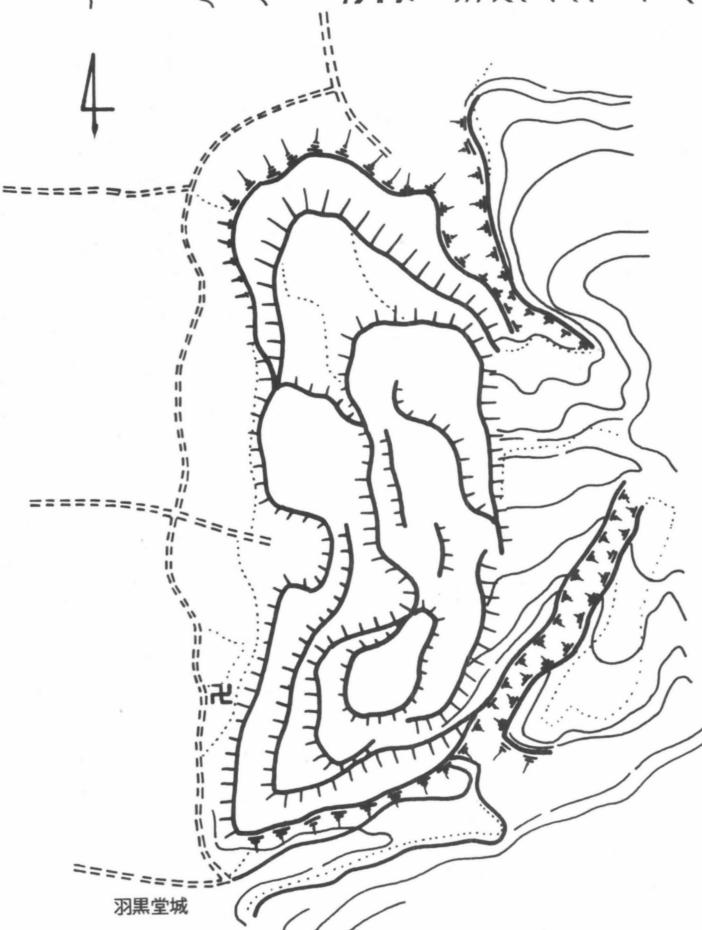
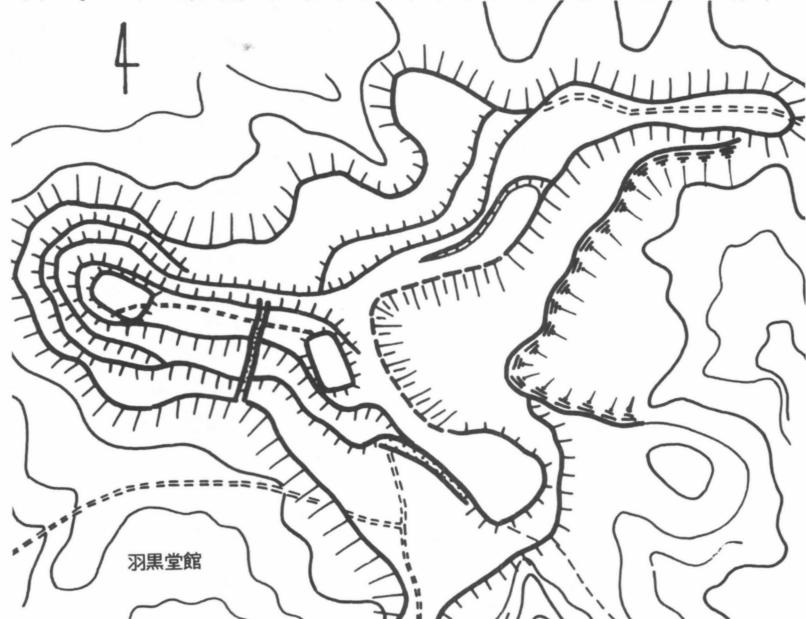
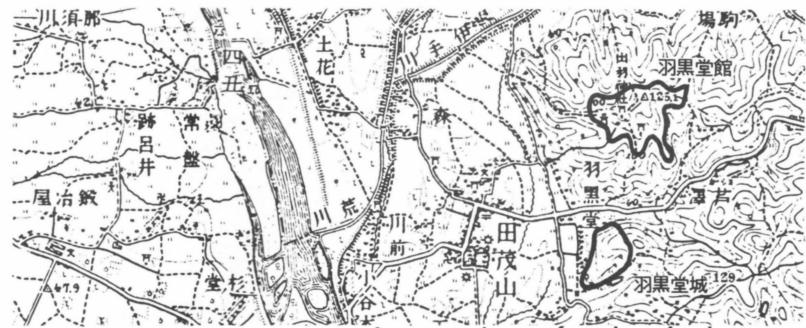
羽黒堂館（蝦夷の砦） 水沢市羽田町字御

山下

三叉の尾根を利用した山城。標高125mあり麓西際に北上川旧河道がせまる。本丸はいま出羽神社のある一帯と解され、これより尾根づたいに約130m 西にいくと物見郭的平場となる。また本丸より北東方へ200mほどいくとここにも小郭があり、同じく南東方約120mのところにも小郭がある。西郭、南東郭には小祠が祀られている。城は全体的に4段前後の狹少な帶郭がめぐり、それに直交する形で数条の通路用濠がある。南方約800mの地点に羽黒堂城を望む。館主不明。

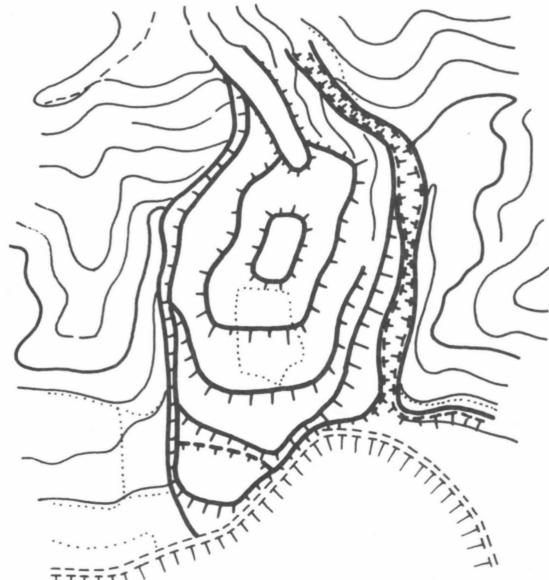
羽黒堂城（古館） 水沢市羽田町字八木沢

北上川旧河道が大きく西へ蛇行する左岸に城の裾部があたる。標高74mの本丸を中心に東西230m、南北400mの規模の連郭式山城。本丸から北に2段の、南へ1段の郭を設け、その下部にさらに狹少な帶郭を数段配す。東側は自然地形利用の小谷で、丘陵基部から画される。帶郭の遺存状況は南郭周辺で良好にみられる。北に羽黒堂館を、南に北鶴ノ木館を望む。戦国時代、城主は羽黒堂氏と伝える。



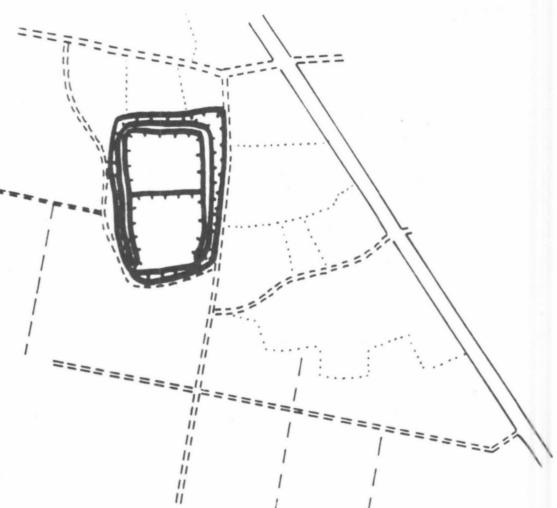
黒田助城（館） 水沢市羽田町字門下

北上山地は西流するいくつかの小河川で開析されるが、当城も大田代川が裾部を洗う。立地は同川の右岸、急峻な自然地形を利用している。標高102m、輪郭式山城。北から延びる丘陵基部は空濠で画し、その規模は東西160m、南北270mある。頂上40×25mの平場が本丸で、下に向って3～4段の帯郭を配す。土壘はみられない。室町時代後期の城主は菊池氏という。近くを東西南北に古道が通り交通の要衝にある。



上姉体城（館） 水沢市姉体町字寺の西

北上川右岸の平坦地にある。一帯は北上川旧河道が削り残した微高地東縁部で、標高35～36mのところである。館は東西65m、南北110mの単郭式。周囲に水濠を幅10mの規模でめぐらし、南面を除く三面には高さ2～3mの土壘がつくられている。郭内はさらに中央付近から北が一段高い構造である。北約60mに菅原神社が、さらにその北方140mのところに慈眼寺がある。城主は天正頃まで柏山氏家臣千田豊後であったと伝える。



中野城（館） 水沢市真城字館

標高37～38m。東西110m、南北120mの複郭式平城。北郭は一段低い南北約40mの規模で東・西・北面に高さ1.5m、幅3～4mの土塁。南郭は一段高い畠地で、周囲に高さ1.5～2m、幅2～3mの土塁。なお、西辺部の土塁は高さ3m位ある。濠痕跡は北・南郭を東西に画する土塁に沿い、西辺部で僅かに認められる。城主は柏山家臣の千田与左衛門と伝える。

内館（下姉体城・本丸） 水沢市姉体町字天神林

大深沢川を西と南の自然濠に利用。その北岸上の微高地に立地する。標高は32m前後。館は内館、松川館、西館、道場館の四郭からなり、全体規模は東西200m、南北160mある。このうち内館が主郭をなすと解され、その規模は東西65m、南北70mあり、周辺より一段高い構えである。南面を除く三面に高さ1.5～2m、幅4～5mの土塁がめぐり、さらにその外に幅5mの水濠がめぐる。その一帯を「宿」という。城主は葛西家臣の大内源次郎と伝える。

青篠城（古館） 江刺市玉里大松沢

玉里地区の中央、青篠の集落にあり、市立東中学校の南隣である。地元民は館ヶ森とも呼んでいる。南方にのびる丘陵端部に立地し東西は急崖をなす。丘陵の中腹の北西から南方にわたって空堀がうがたれている。頂部の平坦面は東西30m×南北80mの規模であり、主郭と思われる。その南方下位に2段の平坦面があり、腰郭的なものと思われる。

「仙台領古城書上」には、東西20間×南北60間と見え、菊池右馬丞を城主としている。この人物は江刺兵庫守の家老と伝えられている。

ちなみに、江刺郡内に散在する菊池氏は、九州菊池氏の分流を名のっており、葛西氏を頼って江刺郡に来住し、江刺氏の臣として角掛郷の青篠城に居住したと伝えられている。

天正15年（1587）には、青篠城主菊池右近恒邦と、その子の太田代伊予が主家の江刺三河守を諫言したため、伊予は討たれ、右近も難を避けて江刺郡を脱走したといわれている。

